岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(34)

栢寺廃寺緊急発掘調査報告書

1979. 3

岡 山 県 教 育 委 員 会

文 化 課

序

諸開発の進歩にともない，埋蔵文化財に対する破壊損傷がいたるところで増大しつつある折，古代吉備の一中核であった備中南部平野においても，急速に宅地化の波がおしよせ，静閑なたたずまいの中にあった栢寺廃寺とその周辺一帯もその例外ではなくなりました。

このたび，昭和52年度には単県事業として一部緊急発掘調査を実施し，ひきつづき昭和53年度には国庫補助をうけて調査を継続いたすことになりました。第二次調査地は，多くの水田と競合していたため，秋の収穫後になって調査に着手せざるをえないという事情もあり，充分な調査期間がとれなかったようでありますが，ともかく所期の目的を達することができましたので，ここに第一次および第二次調査の結果を刊行いたします。

この間，地権者の方々のご協力と，研究者各位から温いご支援のあったことに対し深く感謝の意を表するとともに，本小報が今後の埋蔵文化財の保護と研究にいささかなりとも役立つとすれば幸いです。

昭和54年3月

岡山県教育委員会

教育長 佐藤章一

例　　言

1．これは岡山県教育委員会が国庫補助を受けて実施した，総社市南溝手に所在する栢寺廃寺についての緊急発掘調査の報告書である。なお，昭和52年度に県費で実施した調査の報告も併せて掲載している。

2．発掘調査にあたっては加夜廃寺緊急発掘調査委員会を組織し，その指導・助言のもとに，文化課職員葛原克人，岡本寛久が担当・実施した。昭和52年度の発掘調査は同課職員河本　清，葛原克人，岡本寛久が担当した。調査中，文化課職員河本　清，正岡睦夫，山磨康平の援助を受けた。

3．発掘調査中には，文化庁文化財保護部記念物課西　弘海氏の現地視察を得て，種々の教示を受けた。また，間壁忠彦，間壁葭子両氏にも現地で助言を得た。感謝の意を表します。

4．実測にあたっては，山門と本堂との中間に任意に原点を設定し，ほぼ現在の門満寺の建物の方位に合わせて主軸を設定した。(N－8°05′30″－E) 実測図中のポイント数値の単位はメートルである。

5．発掘調査は昭和53年11月30日から昭和54年3月6日まで実施し，それ以後3月30日まで，岡山市西古松文化課分室において報告書作成作業を実施した。

6．この報告書の作成編集は葛原と岡本が担当した。執筆分担は各文末に示す。作成編集にあたって，遺物の実測については平井典子，古屋野桂子，山本悦世，拓本については細川早苗，坪井和江，浄写については平井典子，細川早苗の諸氏の手を煩せた。また文化課職員伊藤　晃・柳瀬昭彦・岡田　博・山磨康平の他，塩見康代・三宅靖子の諸氏にもお世話になった。併せて感謝します。

7．高度値はすべて海抜高である。方位については第1図・第2図は真北，他は磁北である。

8．出土した遺物および実測図・写真類は岡山市西古松文化課分室に保管している。

本　文　目　次

序
例　言
目　次
第１章　地理的・歴史的環境……1
第２章　名称の由来と調査の経過……6
第３章　発掘調査の概要……12
　第１節　昭和52年度発掘調査……12
　第２節　昭和53年度発掘調査……15
第４章　遺　　物……23
第５章　まとめにかえて……29
　　栢寺廃寺の占める位置……29
　　創建時期および氏族の動向……30
　　栢寺廃寺出土の瓦……30
　　栢寺廃寺の伽藍と寺域……32

挿　図　目　次

第１図　栢寺廃寺の位置（Ｓ＝１/50000)……1
第２図　栢寺廃寺周辺地形図（Ｓ＝１/5000)……2
第３図　備中南部古代寺院址（Ｓ＝１/30万)……4
第４図　昭和53年度発掘調査トレンチ位置図（Ｓ＝１/1500)……8
第５図　第１次調査トレンチ位置図（Ｓ＝１/500）……14
第６図　Ｔ－１東壁断面図（Ｓ＝１/80)……15
第７図　Ｔ－１南壁断面図（Ｓ＝１/80)……15
第８図　塔基壇実測図（Ｓ＝１/120）……17
第９図　Ｔ.１，Ｔ.９，Ｔ.11，Ｔ.15実測図（Ｓ＝１/80)……19
第10図　Ｔ.２実測図（Ｓ＝１/80）……20
第11図　Ｔ.８，Ｔ.10，Ｔ.20，Ｔ.22実測図（Ｓ＝１/80)……21
第12図　Ｔ 13，Ｔ.23－2，Ｔ.24実測図（Ｓ＝１/80)……22
第13図　出土遺物 (1)　軒丸瓦（Ｓ＝１/４)……25
第14図　出土遺物 (2)　軒丸瓦・軒平瓦（Ｓ＝１/４)……26
第15図　出土遺物 (3)　塼・軒丸瓦・隅切瓦（Ｓ＝１/４）……28

表　目　次

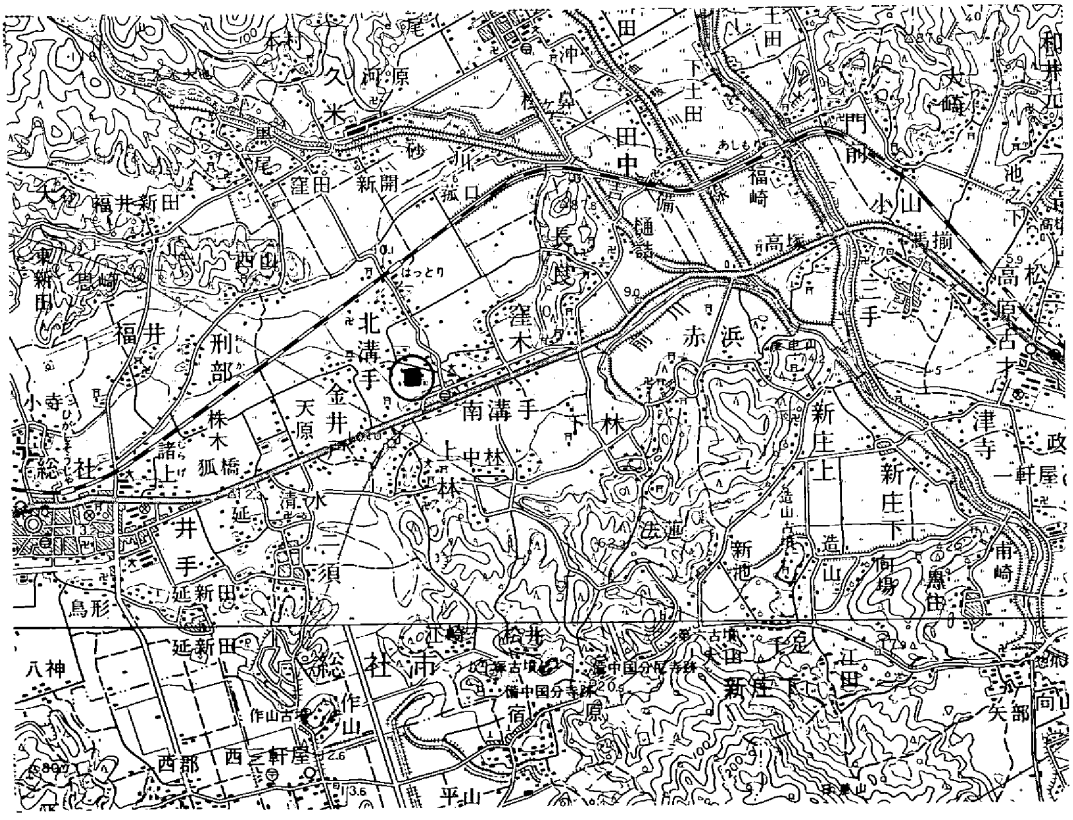
表１　備中古代寺院址一覧表……5

図　版　目　次

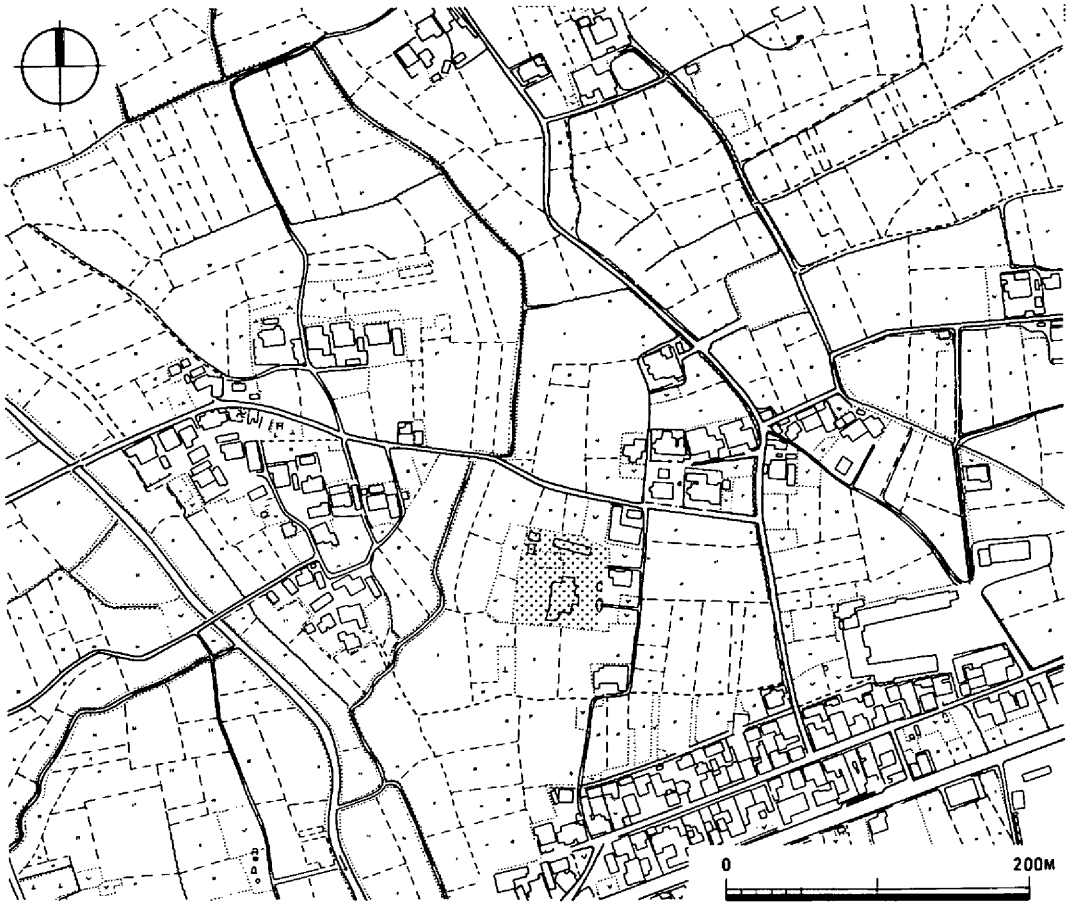
図版１　全景
図版２　境内近景
図版３　境内地残存礎石
図版４　塔基壇全景
図版５　塔基壇細部
図版６　第15トレンチ塔基壇東端延石列
図版７－１　第１トレンチ延石細部（東から）
　　－２　雨落溝検出状況（東から）
図版８　塔心礎抜取穴
図版９　塔基壇南端
図版10　塔基壇周辺トレンチ
図版11　第８トレンチ
図版12　第20トレンチ
図版13　溝状遺構
図版14　第４トレンチ
図版15－１　第26トレンチ　井戸（南から）
　　－２　第６トレンチ（東から）
　　－３　第20トレンチ　上部瓦礫溜（北から）
図版16－１　第10トレンチ（南から）
　　－２　第13トレンチ（北から）
図版17　出土遺物　軒丸瓦
図版18　出土遺物　軒丸瓦
図版19　出土遺物　軒平瓦
図版20　出土遺物　軒丸瓦・塼・隅切瓦

第 1 章　地理的・歴史的環境

ここに栢寺廃寺として報告する古代寺院址は，後章でやや詳しくふれるとおり，従来，賀夜寺阯，南溝手廃寺，加夜廃寺，門満寺などとも呼称されてきた。この寺院址は，現在の行政区によれば総社市南溝手にあり，古代には備中国賀夜郡に属していた。位置するところは賀夜デルタのただ中である。賀夜デルタは，通称総社平野とも呼ばれ，この沖積平野の形成は県下三大河川の一つである高梁川およびその分流の堆積作用に負っている。高梁川は中国山地から流れ出る水量をうけ，渓谷をぬって，吉備高原の南端部から総社平野へ突入する部位で西から東へ流路をもつ新本川と合流し，さらに南下し，ふたたび東流する小田川を合せ，いっそう水量を増しながら，流身を南へとって瀬戸内に流れ込む。流程は約110km である。ほぼ南流するこの大河が備中国を大きく西半部と東半部に二分しているのである。ところで以東には，いま現在，ようやくその機能をつづけている一条の小水路があるが，実はそれは古代において重要な意味を担っていたかなり大規模な河道であったのである。小水路の両側には，他より一段低い水田が旧河道の存在を暗示するかのように続いていて，本来の河道の肩幅は数十メートルにも達する。おそらくこの河道が，『備中国風土記』逸文にでてくる「宮瀬川」ではないかと思われるのである（註１）。『和名抄』に記載された郡下の郷名を整理し



第１図　栢寺廃寺の位置（■印）（Ｓ＝１/50000）



第２図　栢寺廃寺周辺地形図（Ｓ＝１/5000）

て現在の字名と照合させてみると，ほぼ西から東へ流路をとるこの河道によって，郡が分けられている。すなわち賀夜郡がその以北に，窪屋郡がその以南に存在したこととなり，この河道こそ「郡境の河道」であった想定に導かれるのである。郡境の河道は，高梁川本流から「井尻野（いとりの）」付近で分岐し，「井手（いで）」「延（のべ）」「清水（しみず）」を通り，三須の低丘陵の以北に沿って蛇行しながら東流し，やがて足守川（大井川）と合流して，備中高松の山裾を貫流しつつ「宮内（みやうち）」の方へまわりこみ，一路南流して「吉備の津」へ注ぐ。そして，広大な沖積地の北方には，吉備高原の南端にあたる標高400ｍばかりの山並がそびえ，そのうちの鬼城山は古代朝鮮式山城として，近年，強い関心をあつめている。いっぽう南方もまた，標高約300ｍの山々が並立し，なかでも中世山城として著名な史跡福山城や，まさに所堅固の城といえる幸山城がある。これらの主峰から北へ突出した低丘陵上には夥しい数の古墳および古墳群が形成されているばかりでなく，その北側のほぼ東西をさして連なる三須の丘陵上にも約250基の古墳が確認されている。この低丘陵の両側には，全長約270ｍの前方後円墳・作山古墳と，全国第４位で全長約350ｍを測る造山古墳が所在する。古墳時代後期に至っても，横穴式石室を内部

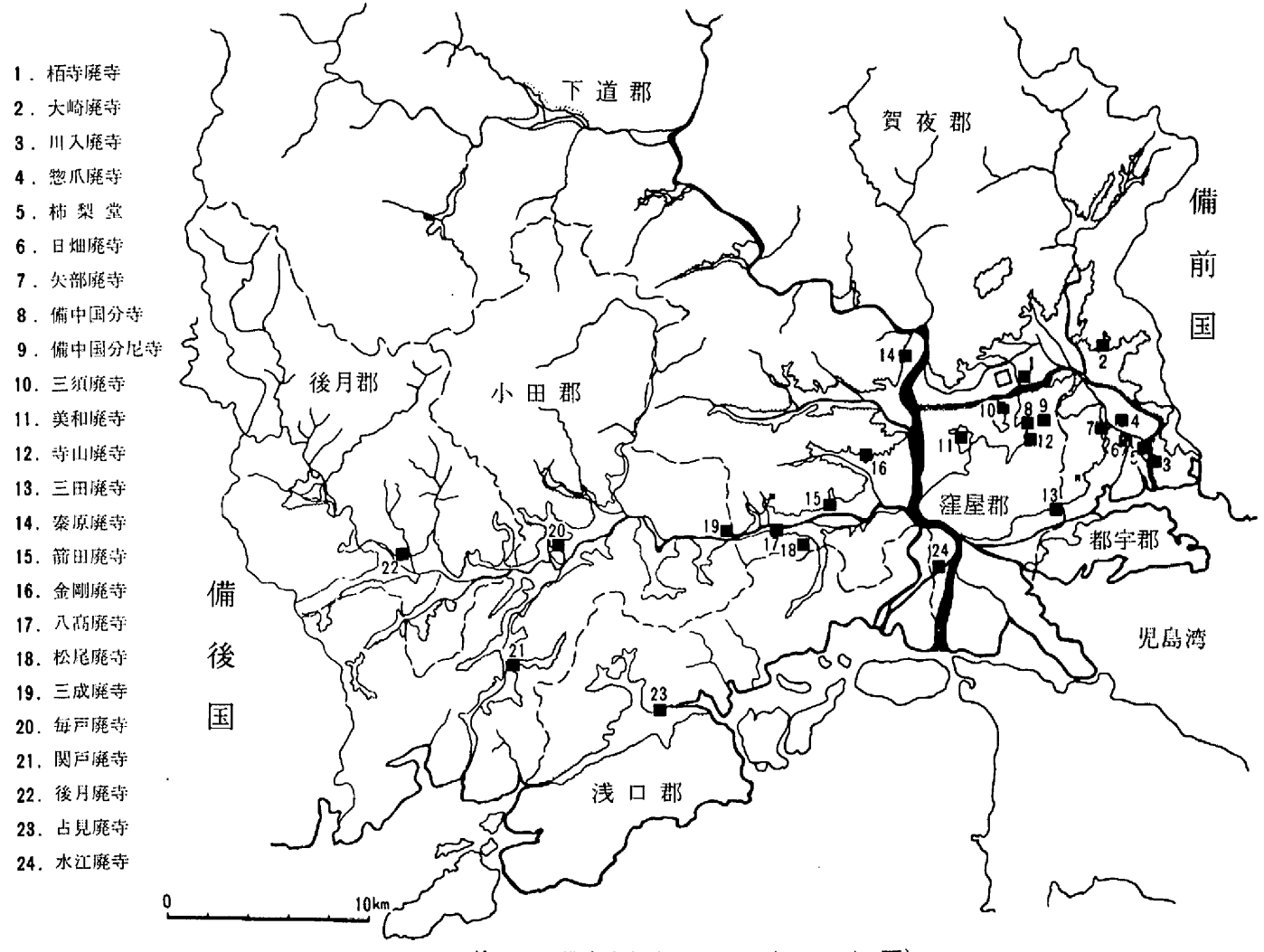
主体とする無数の円墳群が，都窪郡三因や三須緑山に築成されているし，やや独立した場所に全長約100余mの前方後円墳で巨大な横穴式石室を主体部にもつ備中こうもり塚古墳が築かれている。このように，備中南部平野とその周辺には，吉備政権を構成した有力な諸集団が，一貫して居住区を定めその政治勢力を誇っていたのである。

さて，備中国における古代寺院址は，かならずしも内容の明らかでない古瓦出土地点もふくめて総計すると，24遺跡を数えることができる。あらかじめ『和名抄』(註２）による郷名にもとづき郡境を復原して，寺院址の分布図を作成したものが第３図である。これはいうまでもなく，郡名，郷名，廃寺名，所在地，備考に区分してまとめた第１表と補完関係にある。各寺院址について逐一説明することは省略して，先学による寺院址研究からすでに明白になっているいくつかの特徴点を要約的にのべて，栢寺廃寺の概要報告の一助にしたい。

まず第１に，吉備寺式瓦とその分布についてふれよう。吉備寺式という呼称を生んだ瓦は，吉備郡真備町前崎鐘林山吉備寺にある国指定重要文化財の鬼瓦である。縦33.3×横31cmを測る円頭形の瓦で（註３），蓮華文は，中央は蓮子６を含む中房が２段に高く表現され，８葉の重弁と間弁を配し，それをめぐって18個の大粒な珠文を置く。外区には，瓦形にそって二重鋸歯文と二重半円文帯とが施され，全体として華麗な意匠となる。同様の文様をした軒丸瓦は３種類も知られているが，うち２種類は，二子御堂奥古窯址群から検出され，かつて類別して紹介したとおりである（註４）。二子２類と同４類がそれにあたり，第２類と同一形式のものは日畑廃寺で，第４類のものは秦原廃寺，英賀廃寺から採集されている。のこる岡田廃寺のものは花弁が棒状を呈しやや後出的な要素がある。いずれにせよ，白鳳時代にこうした独特の華麗な瓦当文の使用が複数の氏寺に認められたことは吉備氏一門の同族的な結合紐帯の反映であり，潜在的自主性を暗示するものといってよい。またこの瓦当文は，備中圏内にとどまり，備前・備後・美作においては発見例がないから，強いていえば備中式とでもいうべきであろう。

第２の特徴は，平城宮址の第２次朝堂院にふかれた6225形式の，亜式瓦の普及期がおとずれる点である。亜式とする理由は，平城宮のそれと異り，周縁の外行鋸歯文が細線で表現される点で，同様に細線化した蓮弁も，間弁との区別がむづかしい意匠に変化するなどの事実による。ともかくこの瓦は，天平期のある時期に，ほとんどの氏寺に波及する。律令体制形成期における吉備一族の体制へのほぼ完全な併呑を物語るのであろう。（葛原）

註(1) 高木市之助他監修『風土記』日本古典文学大系２ 岩波書店 1958年
葛原克人「古代吉備豪族の誕生」『歴史手帖』４－６ 1976年
(2) 池邊 彌『和名類聚抄郷名考證』1966年
(3) 柳瀬昭彦・岡田 博『岡山県の原始・古代』岡山県立博物館図録 1974年
(4) 葛原克人・池畑耕一「二子御堂奥古窯址群」『山陽新幹線建設に伴う調査 II』
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告２ 1974年



第３図　備中南部古代寺院址（Ｓ＝１/30万）

表1　備中古代寺院址一覧表

郷名	廃寺名	所在地	備考
賀夜郡 庭妖，板倉，足守，大井，阿曽，服部，八部，生石，刑部，日羽，多気，巨勢，有漢，大石（河原里）一平城宮出土木簡天平19	栢寺廃寺（賀夜廃寺） 大崎廃寺（楢見寺） 川入廃寺	旧　吉備郡服部村賀陽山門満寺 旧　吉備郡高松町大字大崎楢見 旧　都窪郡吉備町川入	心礎1，礎石若干（6225亜式鐙瓦）その他鐙瓦 基壇造成面（〃）〃 築地痕跡（〃）円面硯等
都宇郡 河面，撫河，深井，駅家（建部郷）一備中国大税負死亡人帳天平11 （津蚫駅）一延喜式兵部省	惣爪廃寺（津寺） 柿梨堂（撫川寺） 日畑廃寺（赤井堂） 矢部廃寺	旧　都窪郡加茂村大字惣爪字釜 旧　都窪郡撫川町大字日畑東組納所 旧　都窪郡庄村大字日畑西組赤井 旧　都窪郡庄村大字矢部築地ノ内	心礎1（〃） （〃） 礎石5　吉備寺式 （6225亜式鐙瓦）
窪屋郡 大市，阿智，奠善，真壁，輕部（奠和郷）一備中国大税負死亡人帳天平11	備中国分寺 備中国分尼寺 三須廃寺（観音院） 美和廃寺 寺山廃寺 三田廃寺（東光寺）	旧　都窪郡三須村大字上林国分寺 旧　都窪郡三須村大字上林法運 旧　都窪郡三須村三須 旧　吉備郡総社町三和 旧　都窪郡山手村宿 旧　都窪郡管生村大字三田	寺域確認　天平瓦 寺域確認　〃 礎石2（6225亜式鐙瓦） 基壇造成面　天平布目瓦 寺前，寺西などの地名残存，古瓦時期不明
下道郡 穂太，八田，遍磨，曽能，秦原，水内，訓代，近似，成羽，弟翳，穴田湯野，河邊，呰妹，田上	秦原廃寺 箭田廃寺（吉備寺） 金剛廃寺（岡田寺） 八高廃寺（八高堂） 松尾廃寺（？）	旧　吉備郡秦村字寺薮 旧　吉備郡真備町箭田村鐘林山吉備寺 旧　吉備郡真備町岡田村岡田山ノ谷 旧　吉備郡穂井田村八高 旧　吉備郡真備町服部松尾	心礎1　礎石若干　吉備寺式，その他鐙瓦 心礎1　礎石若干　〃 礎石11　〃 心礎1　単弁系蓮花文鐙瓦・6225亜式 低丘陵上　花蝶文鐙瓦
小田郡 賀成，拝惣，草壁，小田，甲努，魚渚，駅里，出部	三成廃寺（下道館址） 毎戸廃寺（小田郡衙址） 関戸廃寺	旧　小田郡三谷村大字東三成字瓦谷 旧　小田郡中川村大字浅海字毎戸 旧　小田郡関戸村唐臼	（6225亜式鐙瓦） （〃）
後月郡 荏原，縣主，出部，足次，駅家	後月廃寺（寺戸廃寺）	旧　後月郡西江原大字寺戸	
浅口郡 阿智，間人，船穂，占見，川村，小坂，拝師，大嶋	占見廃寺 水江廃寺（？）	旧　浅口郡金光町占見	瓦窯併存
英賀郡 中井，水田，呰部，刑部，丹部，林郷	英賀廃寺（赤茂廃寺）	旧　上房郡上水田村大字赤茂字高倉	吉備寺式
哲多郡 石蟹，新見，神代，野馳，額部，大飯			

第 2 章　名称の由来と調査の経過

栢寺廃寺は，総社市南溝手栢寺元にある。この古代寺院址をさして，これまでに，賀夜寺阯（註１），南溝手廃寺（註２），加夜廃寺（註３），門満寺（註４）などと種々の表記法がとられてきたが，それは，それなりに理由があったようである。賀夜寺阯，加夜廃寺と呼称した研究者は，主に４～５世紀の吉備政権を構成した有力氏族の一つとして，日本書紀に蛟屋氏・加屋氏などと記載されているうえ（註５），奈良期から平安期にかけても賀陽氏が登場するところから，同氏の氏寺を想定しつつ呼称したものと思われる。賀陽氏の研究に関する第一人者である藤井駿氏は，寛平５(893)年，備中国介となった三善清行の一族が罹病して，のち郡大領賀陽豊仲の子供にも伝染したという記録(註６)をよりどころに，官人層の行き来はしばしばあったろうから，国府と賀陽氏館の近接した位置関係を想定され，同時にまた氏寺もそう離れた場所にはないと考え，本寺院址を暗に賀陽氏の氏寺とされている（註７)。いっぽう，賀陽氏がその本貫地として，足守川上流域から総社平野の北方をふくむ広範な地を領有していたとしても，その範囲内には，大崎廃寺（楢見廃寺）もあり，本寺院址を，賀陽氏の唯一の氏寺と断定する積極的な根拠は考古学上なにもないから，むしろ古代寺院址に対して付ける名称の慣習にしたがい字名を冠して呼び，歴史的な混同を避けようとの配慮から，おそらく生じた名称が大字名をとってつけた南溝手廃寺であろう。また，門満寺とする例もあるが，これは，本寺院址のうえに重複して後世，賀陽山門満寺として再建された寺院に依って命名されたものである。

ところで，この寺院址の所在する場所は，現在の行政区に従えば前記したとおり，総社市南溝手字栢寺元にある。いま少し当地の合併村史をひもといてみると，①　明治17年８月13日，茅村を母村して窪木村・南溝手村・北溝手村が分村している。②　ついで明治22年６月１日，上記３村と長良村が合併して服部村が誕生し，③　服部村は昭和26年４月１日に総社町へ併合され，④　昭和29年３月31日総社市の一部として新市域内にふくまれることとなるのである。以上みたとおり，寺院址の所在地が「栢寺元」で，またこの寺院址は町村合併の開始される一時期に「茅村」の中に位置していたのである。「栢」「茅」ともに「カヤ」と表音するばかりでなく，多くの地元の人々もこの寺院址を「カヤでら」と呼んでいるから，一貫して継承されている小字名をとって「栢寺廃寺」とよぶことにしたい。切絵図にみえる「栢寺元」の範囲は，東西約１町，南北１町半で，一帯に古瓦の散布が顕著な事実と相まって，昔日の寺域のなごりとみなされているのである。なお，想定寺院址の東方には「栢寺前」の地名もみられる。

その後，山号を賀陽山と称する浄土宗の門満寺が，古代寺院址と重複して創立される。寺伝によれば，平安時代中頃，賀陽良藤により開基されたという。藤井駿氏の研究（註８）に依拠して，その変遷を要約すればつぎのようになろう。すなわち，当時，賀陽氏一門は備中国賀夜郡の郡大領や，吉備津彦神宮の禰宜をつとめ，良藤自身も備前少目の任を果したのち，本貫地の足守に居住した。狐に化されある日，突然失踪した彼を，一族郎党が無事祈願したところ，ようやく帰館したので記

念として宅地を移して七堂伽藍の大寺となし，本尊に十一面観音像をむかえた，と伝える。この物語は『扶桑略記』『今昔物語』『元亨釈書』『賀陽良藤物語絵巻』に掲載された『狐草子』の原型として著名である。

その後，1336（建武３）年 福山合戦で焼失したが，ふたたび阿州美馬郡里邑の人，蒙光上人が，43才にして備前網浜から備中服部へ訪き再建した。中興の祖，蒙光上人は1680（延宝８）年に小庵を営み，1682（天和２）年に仮堂を建て本尊に阿弥陀如来を安置し，貞亨年中（17世紀後半）には，備中藩の家老伊木尉監なども厚い信仰をよせていたことが手紙類から推察できる。さらに，1751（宝暦７）年に至り，福武氏が浄財をあつめ脇侍を寄進した。つまり，右，月光勢至菩薩，左，十一面観音像で，共に身丈３尺５寸である。しかし，いまは無住となり，浅口郡鴨方町浄光寺住職中村護孝氏が併務して管理にあたっている。つい最近になって，宅地化の波が賀陽山門満寺のすぐ近辺にまで及んできた。門満寺の寺域外であるにしても，最低方一町と推定される栢寺廃寺の想定寺域内に完全に入った宅造計画がすでに二件もちあがっていて，そのうちの一件については，山土を盛りあげ整地すらおえていたのである。県教委は総社市教育委員会と合議を重ねつつ，地権者の意向を打診したところ住宅建設を急いでいることがはっきりした。そこで異例なことであるが，にわかに単県費をもって緊急対応して，次の方策を考えようとの方針が決定された。まず宅地予定部分について遺構の存否を確め，合せて寺域や伽藍配置を把握したうえ，保存対策を検討する必要にせまられたのである。昭和52年度事業として取り組んだいわば第１次調査は，昭和52年12月１日から昭和53年３月31日まで実施し，次章に発掘区を掲載したように，トレンチ調査によって，所期の目的を達成させようとしたのである。（葛原）

昭和53年度調査は国庫補助を受け，昭和53年11月30日から延べ60日間にわたって実施した。調査はトレンチによる寺域の推定と伽藍配置の復原を目的としたものであった。現在ある門満寺の本堂東正面の境内地の発掘から着手した。これは，昨年度の調査において，この地区に設定した第１トレンチで基壇の版築土とみられる土層が検出されたため，この土層の平面的な広がりを追求することを主眼にしたものであった。トレンチは番号順に設定発掘し，第１・３トレンチで基壇北端の延石列が発見され，第２トレンチでは大形土坑が検出された。大形土坑は，第２トレンチを南へ拡張して確認した基壇地業に伴うとみられる石列と北延石列のほぼ中間点に位置することと，坑内から塔心礎の石材である花崗岩の割石が多量に出土したことから，現在本堂正面の南東におかれている塔心礎の抜取穴と想定した。現在の境内地内に検出した塔を配置すれば，西に金堂，北に講堂という，いわゆる法起寺式の伽藍配置がもっとも可能性が強いため，それぞれの伽藍の推定位置，すなわち本堂の裏と北にトレンチを設定発掘した。しかし，この両地域はかつて門満寺の建物が存在したこともあってか削平が激しく，所によっては廃寺建立前の堆積土のすぐ上に近世の陶磁器・瓦片を包含した層が載るという土層堆積状況を呈し，伽藍を推定する根拠を得ることができなかった。なおこの間，塔基壇では，東端・西端を検出することができ，一辺約13.5ｍの塔が復原された。本堂裏の状況は前述のとおり思わしくなかったが，本堂の東から北の境内地では，瓦礫層がかなり広範に認められた。この層には白鳳から奈良時代の瓦が多量に包含されていたが，近世以降の遺物は

含まれないようで，門満寺創建に伴う整地層と考えられた。所々では瓦礫の詰まった大形土坑が存在し，塔中央部でも，心礎抜取穴に切られてこの種の土坑が存在していた。瓦礫層の下に，廃寺建立前の堆積土上面で瓦礫の集積がもう一層認められ，注意された。平安時代の瓦が含まれ，また礫とかなり混入した状況を呈しているため，二次的な堆積の可能性が強いものではあったが，廃寺に関係しそうな数少ない痕跡の一つとみられた。とくに，第20トレンチでは溝状の落込み内にこの瓦の堆積が見られたが，伽藍に伴う施設と断定する根拠は見出せなかった。このように境内地内については塔以外の伽藍を検出することができなかった。

次に門満寺周辺の水田部の調査に入った。寺の南の水田に南北トレンチを40m以上にわたって入れ，遺構の検出に努めた。しかし，水田が境内地から１m以上低いことから，当初予想したように大幅な削平を受けており，耕土下はすぐに廃寺建立前の堆積層になった。わずかに溝１本と柱穴３基を検出したにすぎない。溝の時期は明確ではないが，その走行や，瓦の包含等から，廃寺とは直接につながらないものと判断された。寺の北西方の推定寺域北端の水田にも試掘溝をあけたが，時期不明の井戸が検出されたのみであった。

昭和53年度の調査は上記のような経過を辿り終了した。後世の攪乱が激しく，廃寺に関連した遺構は多く消滅し，わずかに塔基壇を検出したに止まったが，幸い塔の規模はほぼ把むことができた。伽藍の規模と寺域の広さはかならずしも比例するとはいえないが，推定の根拠にはなりう

第４図　昭和53年度発掘調査トレンチ位置図（S＝1/1500）

る。従来まったく不明であった栢寺廃寺の寺域について，主要伽藍の一つである塔の位置と規模と方位が確認されたことは，大きな前進としなければならないであろう。

加夜廃寺緊急調査委員会

委員長	井上　隆	岡山県教育委員会教育次長
副委員長	岡崎妙雄	総社市教育委員会教育長
委　員	藤井　駿	岡山県文化財保護審議委員
〃	水内昌康	〃
〃	鎌木義昌	〃
〃	近藤義郎	〃
〃	飛田真澄	岡山県教育庁文化課長
〃	笹岡米夫	総社市教育委員会教育課長
〃	細谷孫一	総社市文化財専門委員
〃	中村護孝	賀陽山門満寺住職
〃	下妻　栄	総社市東公民館運営審議会委員長
〃	葛原克人	岡山県教育庁文化課文化財保護主査
〃	岡本寛久	岡山県教育庁文化課主事
事務局長	飛田真澄	岡山県教育庁文化課長
〃 次長	吉光一修	岡山県教育庁文化課課長補佐
	小川佳彦	岡山県教育庁文化課主幹
	光吉勝彦	岡山県教育庁文化課文化財二係長

調査にあたっては，地元地権者各位をはじめ，総社市教育委員会職員諸氏に色々お世話になった。また寒中，下記の作業員諸氏にも多大のご援助をいただいた。厚く感謝します。

現地作業員氏名

浅野梅子　石井夏子　岡　将　岡　辰野　岡　房子　小川節子　小川とく子
小川福子　木口秀一　角田勝子　高杉鋭一　高杉清志　林　良文　横田加津江
横田武夫　横田輝子　横田勝子

〈調査日誌〉

昭和53年11月30日　草苅り，測量用ポイント設置作業
12月１日　１・２Ｔ発掘
12月４日　２Ｔ掘下げ，３Ｔ発掘，１Ｔ土坑掘下げ，ポイント設置作業
12月５日　１Ｔ実測・掘下げ，２Ｔ清掃・基壇土検出，３Ｔ掘下げ，４Ｔ発掘，草苅，ポイント設置作業
12月６日　１Ｔ清掃後掘下げ，２Ｔ実測後掘下げ，３Ｔ清掃後土坑掘下げ，５・６Ｔ発掘，草苅，ポイント設置作業

12月７日　１Ｔ掘下げ，４Ｔ掘下げ，６Ｔ掘下げ，７Ｔ発掘，ポイント設置作業　基壇北端線ほぼ検出

12月８日　１Ｔ清掃・写真撮影・北半掘下げ，２Ｔ掘下げ大形土坑検出，３・５Ｔ実測，４Ｔ掘下げ，６Ｔ清掃，ポイント設置作業

12月11日　１Ｔ実測，２Ｔ土坑掘下げ，３Ｔ清掃，４Ｔ掘下げ・清掃，６Ｔ掘下げ，７Ｔ清掃・写真撮影，８Ｔ発掘，基壇北端延石列検出

12月12日　２Ｔ南へ拡張，４Ｔ清掃，５Ｔ南へ拡張，６Ｔ清掃，７Ｔ掘下げ，８Ｔ掘下げ・清掃，９Ｔ発掘

12月13日　１Ｔ清掃・砂利敷検出作業，２Ｔ基壇南端検出，４Ｔ写真撮影，５Ｔ土坑掘下げ，６Ｔ実測，９Ｔ掘下げ

12月14日　１Ｔ砂利敷検出・清掃，２Ｔ基壇南小トレンチ設置・石列検出，４Ｔ掘下げ，５Ｔ土坑掘下げ，６Ｔ実測後掘下げ，10Ｔ発掘，ポイント設置作業

12月15日　２・５Ｔ土坑掘下げ，３Ｔ清掃，６Ｔ清掃・写真撮影，10Ｔ掘下げ，11Ｔ・12Ｔ発掘

12月18日　２Ｔ土坑掘下げ，６Ｔ実測・遺構掘下げ，10Ｔ柱穴掘下げ・清掃，11Ｔ実測，12Ｔ掘下げ

12月19日　２Ｔ土坑掘下げ，３Ｔ写真撮影，５Ｔ土坑掘下げ，６Ｔ実測後掘下げ，10Ｔ清掃・遺構掘下げ，11Ｔ実測後掘下げ・東へ拡張，12Ｔ遺構検出作業，13Ｔ発掘

12月20日　１Ｔ清掃，２Ｔ清掃，５Ｔ土坑掘下げ，６Ｔ掘下げ，10Ｔ写真撮影，11Ｔ東へ拡張・掘下げ・基壇西端確認，14Ｔ・15Ｔ発掘

12月21日　２・５Ｔ清掃・写真撮影，６Ｔ壁面清掃，９Ｔ基壇南西隅確認，10Ｔ実測，14Ｔ基壇端部確認，15Ｔ基壇東端延石列検出，16・17Ｔ発堀

12月22日　１・３Ｔ清掃・写真撮影，６Ｔ南壁清掃・掘下げ，10Ｔ実測後掘下げ，13Ｔ東へ拡張，15Ｔ砂利敷清掃，16・17Ｔ掘下げ，

12月25日　４Ｔ清掃・西端掘下げ・東端落込掘下げ，６Ｔ掘下げ・清掃・写真撮影，８Ｔ清掃・掘下げ，10Ｔ掘下げ，12Ｔ清掃・写真撮影，13Ｔ拡張区掘下げ，18Ｔ発掘

12月26日　４Ｔ落込掘下げ，６Ｔ実測・西端掘下げ・清掃，８Ｔ掘下げ，10Ｔ清掃・遺構掘下げ，16Ｔ清掃，18Ｔ掘下げ

12月27日　４Ｔ落込掘下げ，６Ｔ実測・埋戻し，８Ｔ瓦出土状況清掃，10Ｔ遺構掘下げ，12Ｔ実測，17Ｔ掘下げ

昭和54年１月５日　４Ｔ清掃・掘下げ，６Ｔ埋戻し・西端実測，８Ｔ清掃，12Ｔ実測，遺構掘下げ，13Ｔ掘下げ，17Ｔ掘下げ

１月８日　４Ｔ西端掘下げ，６Ｔ埋戻し，８Ｔ清掃・写真撮影・実測，10Ｔ実測，

遺構掘下げ・南端掘下げ，11T清掃・南壁写真撮影，12T遺構掘下げ，13T遺構検出作業・遺構掘下げ，14T清掃，17T掘下げ

1月9日　4T清掃・写真撮影，8T実測，10T実測・掘下げ，12T実測・掘下げ，17T掘下げ・段検出

1月10日　4T清掃・写真撮影，8T実測・埋戻し，10T掘下げ，12T掘下げ，17T清掃，全体図作製

1月11日　4T実測，8T埋戻し，10T掘下げ，17T清掃・写真撮影，12T掘下げ

1月12日　4T実測，10T清掃・写真撮影，12T掘下げ

1月16日　1・2・3・4・5T清掃，4T埋戻し，19・20T発掘

1月17日　2T西壁写真撮影，13T実測・清掃，19・20T掘下げ，調査委員会開かれる。

1月19日　10T清掃・西壁写真撮影，12T清掃，13T掘下げ，16T清掃・東壁写真撮影，20T瓦溜清掃

1月22日　11T実測・埋戻し，13T掘下げ・清掃，18T埋戻し，20T写真撮影

1月23日　7T遺構検出作業，10T実測，11T実測・埋戻し，17T掘下げ，20T瓦溜遺物取上げ，21・22T発掘

1月24日　7T清掃，10T実測・埋戻し，16T一部深掘り，20T遺物取上げ・掘下げ，21T掘下げ，22T掘下げ

1月25日　7T写真撮影，10T埋戻し，19T清掃，20T掘下げ，21T瓦溜清掃・写真撮影，水田ポイント設置作業

1月26日　10T埋戻し，20T瓦溜清掃，19T清掃・写真撮影，21T掘下げ，22T西壁写真撮影，23T発掘

1月31日　13・16T清掃，23T掘下げ

2月1日　23T東へ拡張・掘下げ・清掃・写真撮影，13T清掃・南壁写真撮影，12・20T清掃，3・11・14T排水作業

2月2日　文化庁西技官視察，2・3・5・11・14T清掃，7・12・19・20・21T崩土除去・清掃，20T瓦溜検出作業，13T実測・写真撮影・埋戻し，11T埋戻し

2月3日　7T崩土除去・清掃，12T南壁写真撮影，13T埋戻し，16T北壁・東壁写真撮影，23T溝・柱穴検出

2月5日　12・20・22T清掃・写真撮影，19T実測，23T掘下げ・写真撮影

2月7日　16・19T実測

2月8日　7・20T清掃，12T実測，21・22T清掃・写真撮影，23T排水作業，24T発掘

2月9日　12T実測，16T埋戻し，23T掘下げ・溝掘下げ，24T清掃・写真撮影

2月13日　12T清掃・遺構掘下げ，14T実測・埋戻し，23T南へ拡張，25T発掘

2月14日　9T清掃・写真撮影，12T実測・埋戻し，19T検出作業・実測，20T清掃・写真撮影，21T清掃，23T排水作業，25T清掃，26T発掘

2月15日　7T埋戻し，9T清掃・石列検出・写真撮影，12T埋戻し，15T清掃，19T実測・埋戻し，21T清掃・写真撮影，26T方形落込検出

2月16日　9・20・21・22T実測

2月18日　9T実測

2月19日　2T東西壁清掃・南端落込検出・写真撮影・実測，5T実測，20T実測

2月20日　2T実測・壁面清掃・写真撮影，5T実測，23・24・25T清掃，調査委員会開かれる。

2月22日　2T写真撮影・実測，15T清掃・写真撮影，19・20・21・22T埋戻し

2月24日　排水作業，2T実測・埋戻し，5・20T埋戻し，17T清掃

2月25日　23T実測

2月26日　1・3・15・17T清掃，17T写真撮影，23T実測，2T埋戻し

2月27日　2T埋戻し・南端掘下げ，17・24T実測，23・25T埋戻し

2月28日　1・3T割付作業，17・24T実測，23・24・25・26T埋戻し

3月1日　1・3T実測，9・17・23・24・26T埋戻し

3月2日　1・3・15T実測

3月3日　1・2・3・15T実測，1T西壁写真撮影

3月4日　1・15T実測終了，1・2・3・5・15T埋戻し・礎石実測

3月6日　撤収作業，発掘調査終了　（岡本）

註(1)　永山卯三郎「賀夜寺阯」『吉備郡史』上巻　1937年

(2)　間壁葭子「官寺と私寺」『古代の日本』3　中国・四国　角川書店 1970年

(3)　註(2)に同じ

(4)　森　郁夫「瓦の様式と伝播」『古代史発掘』9　講談社 1974年

(5)　坂本太郎他『日本書紀』上　日本古典文学体系　67　岩波書店 1967年

(6)　藤井　駿「加夜国造の系譜と賀陽氏」『吉備地方史の研究』1971年
この記事は『政事要略』に依っている。

(7)　註(6)に同じ。

(8)　註(6)に同じ。

第3章　発掘調査の概要

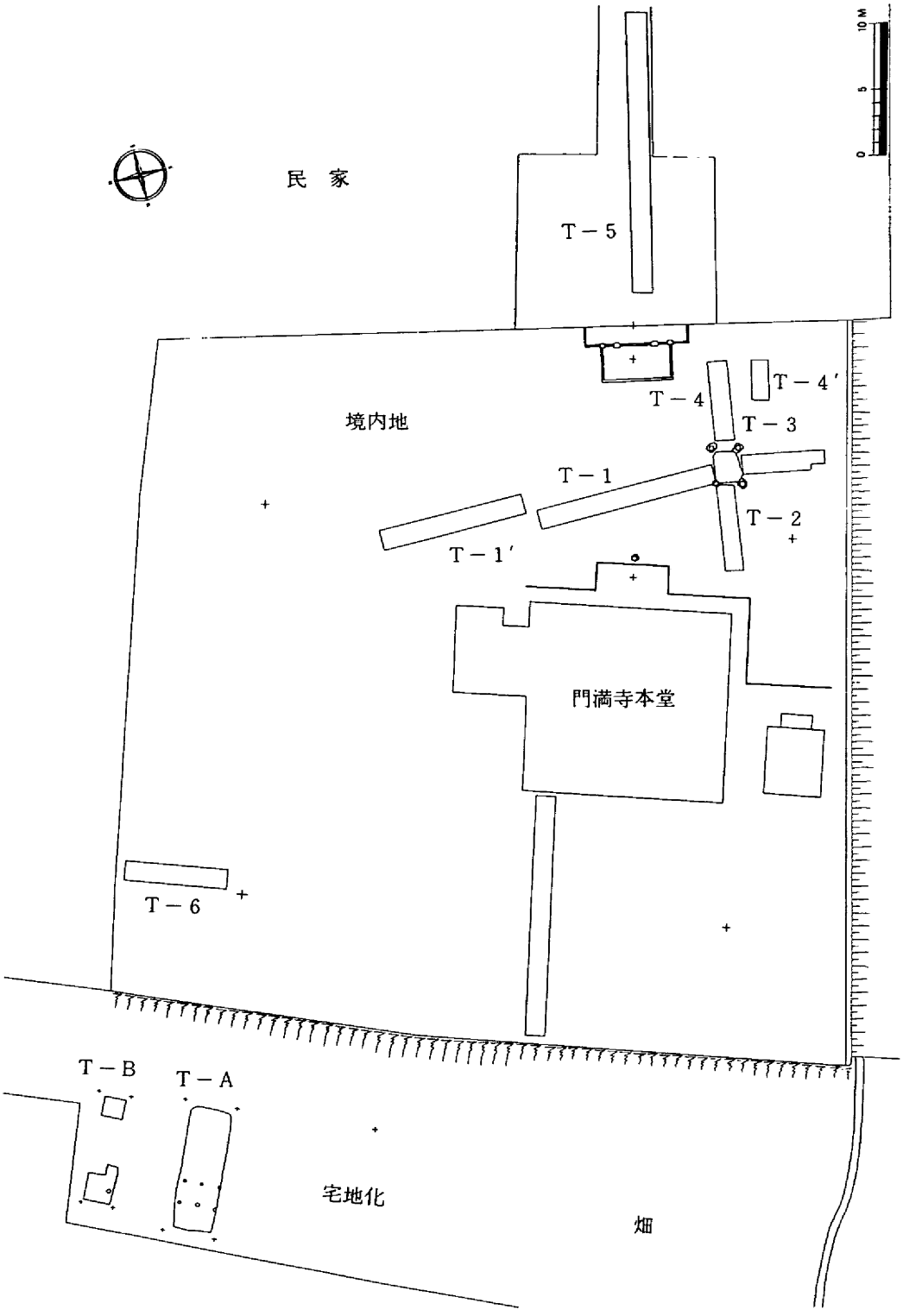
第1節　昭和52年度発掘調査

栢寺廃寺が白鳳創建にかかる寺院址であることは，すでに先学によってたびたび紹介されてきたところである。玉井伊三郎編「吉備古瓦図譜」(註1)，永山卯三郎編「吉備郡史」(註2)，などには，二種類の軒丸瓦と一種類の軒平瓦がのせられている。軒丸瓦の一つは，径約15cmの蓮華文瓦で，内

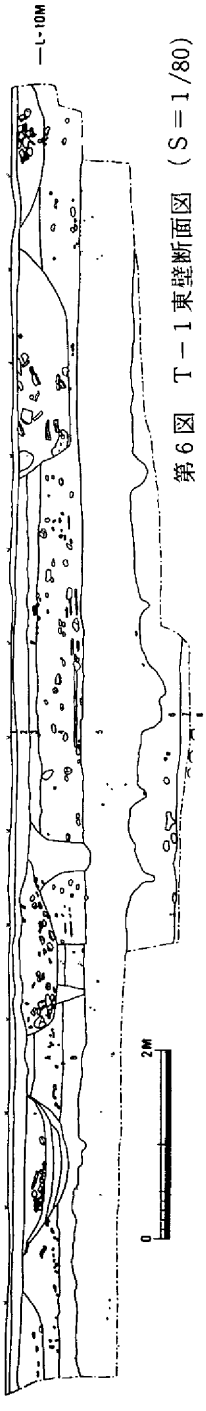
区は１＋８の蓮子を径４cmの中房におさめ，複弁８葉と中房までに達する間弁を配し，32個の重鋸歯文とその間をうめる放射三線からなる，珍しい瓦当である（後章でいう第３類）。他の一つは，直径約16cmの細線蓮華文瓦で平城宮6225亜式瓦である。その瓦は，備中南部の諸寺院址から検出される例がけっして少くないが（註３），本例の特異な点として，内区と外区を分ける圏線が３本を数え他の類似瓦より１本多いこと，および笵割れを示す１本の，みだれた隆起帯が瓦当面をよぎっている事実などを指摘できる（後章の第４類）。そして軒平瓦は，均整唐草文で，平城宮6663型式と符合している（後章の軒平第３類）。先の軒丸瓦が白鳳期のもので，後二者が天平期に属すことは明白である。したがって，少くとも二時期ある寺域の変遷ないし主要伽藍の配置などの究明が当面の課題であることはあらためていうまでもない。

さて，賀陽山門満寺が白鳳創建の寺院址のうえに重複して建設されたことはすでに述べたが，貞亨年間，1680年代に作成され現存する同寺の縁起には，所々に，絵画を挿入している。そのうちの一場面には，賀陽山門満寺の寺域と伽藍配置がみられ，現存する本堂や東面する門，阿弥陀堂の位置関係などみごとにこれと一致する。縁起の中でいまもっとも注目されるのは，東向きの本堂の正面南側に，「心礎」とわざわざ添書きをした巨岩が描きだされている点である。これが，規模からしても古代寺院址の塔心礎であることに一点の疑いの余地もない。あまつさえ，その四隅には，径約60cmの円柱座のある立派な礎石４個があたかも四天柱の位置に据えられているのである。

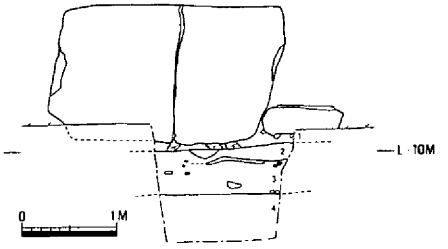
そこで，まず心礎を中心として，それぞれ東西南北へトレンチを設定し，心礎が原状を保っているか否かを見極めると同時に，塔基壇の規模を把握することが，以後の調査方針を決定すると考え，作業に入ることとした。心礎を中心として，磁北にそって北方へ設定したトレンチをＴ－１とし，そのさらに延長部をＴ－１′とした。他のトレンチの設定個所とその呼称は第５図に示したとおりである。Ｔ－１以外のトレンチでは，栢寺廃寺に伴う顕著な遺構はなく，後世なされた人為的な大小の穴や著るしい整地改変層を看取しえたにすぎない。これらの断面観察の結果は，大きく二大別できるが次の第２節において詳述する予定でそちらにゆずりたい。そこで，第一次調査中，もっとも注目され，また多少意見の相違をも生じたＴ－１の東壁に対する所見を記すこととする。第６図を参照されたい。第１層は灰茶色土の境内の表土である。第２層は厚さ10～15cmの茶褐色土で境内地の整地面である。ついで第３層は，10cm程度の厚さをもつ黒褐色土で，黒色に研磨された現代瓦がふくまれている。第２層および第３層から切り込まれた穴が，２～３個みられるがすべて新しい時期の遺物，主として瓦を混入していた。問題は第４層と，それから下層についてである。第４層は厚さ約50cmで，暗茶褐色粘質土を基調にした土層中に夥しい円礫がみとめられる。礫の大きさは，長辺５cm大から15cm大とさまざまであるが，詳細に観察すると，各円礫が水平位置を維持している事実と相まって，幅２cm程度の間層がみられる。間層は，灰色微砂混入土でこの層も水平堆積しているのである。全体的にみてこうした層の形成は，奈良・川原寺の講堂址で看取されたように，基壇の地下構造として人為的に築成されたものである（註４）。通常，旧地表面から上部にある版築層を目にする場合が多いから，これをもって，栗石地業の可能性が強いと認識するまでにはかなりの時間を要したのであった。この層は，心礎の端から北へ約9.2ｍのびている。その北端の同一レベル



第５図　第１次調査トレンチ位置図（Ｓ＝１/500）



第６図　Ｔ－１東壁断面図（Ｓ＝１/80）



第７図　Ｔ－１南壁断面図（Ｓ＝１/80）

には，Ａ層・Ｂ層と表示した層がある。Ａ層は小礫を含む茶褐色中砂混入土で，Ｂ層は黄褐色中砂混入土で，いずれも第４層とくらべて軟かい。第４層の下層，つまり第５層は，黒褐色を呈した土中に，弥生式土器または土師器のごく細片と木炭粒を包含し，厚さは40～80cmで下部は凹凸が激しい。第６層は，灰黄色中砂混入土で，部分的に黄褐色の砂質土塊を混入している。上層の第５層より粘質度はさらに強い。第７層は黄砂混入土で，最下の第８層は礫層である。これは，賀夜デルタの形成時に河川によって運搬された礫であろう。第７図も同一トレンチの南壁の断面図である。基本的な位層関係は先述したとおりで，上層のみややみだれて，うまく合致しない。東壁でみた第４層がこちらの第３層と同一層であることは，土質・色調・礫の存在，間層のあり方などから，明瞭である。そうすると，四天柱のごとく配された礎石は現表土中に存在するから，２次的に移動したものであることが判明し，同時に心礎もいくぶん動かされた可能性が強まることとなる。しかし，栗石地業を想起させる人為的な構造が看取されたので，塔基壇の位置はそれほど離れていないと判断されるのである。

他方，宅地予定部の発掘によって，径約30cm規模の柱痕跡を合計６本検出した。Ｔ－Ａとした発掘区においてである。発見当初，この位置が想定寺域の北西端部にあたるところから，西限を画する築地土塀に伴う遺構ではないかと判断して，さらに北側に発掘区を設定し，またその東側へも延長区を設け，Ｔ－Ｂとした。その結果，結論からいえば，栢寺廃寺の遺構ではないことが明確になった。調査を担当した岡本寛久主事の所見によると，Ｔ－Ａで検出した各柱穴の埋土とＴ－Ｂの延長区で検出された穴の埋土とは，色調・土質とも同一で，延長区の穴からは備前焼の燈明皿などが伴出したからである。（葛原）

第２節　昭和53年度発掘調査

昭和53年度の発掘調査の経過については前述したとおりである。予想以上に後世の攪乱が激しく，栢寺廃寺のものとみられる遺構は塔基壇のみに過ぎなかった。以下，塔基壇の概要を述べ，さらに

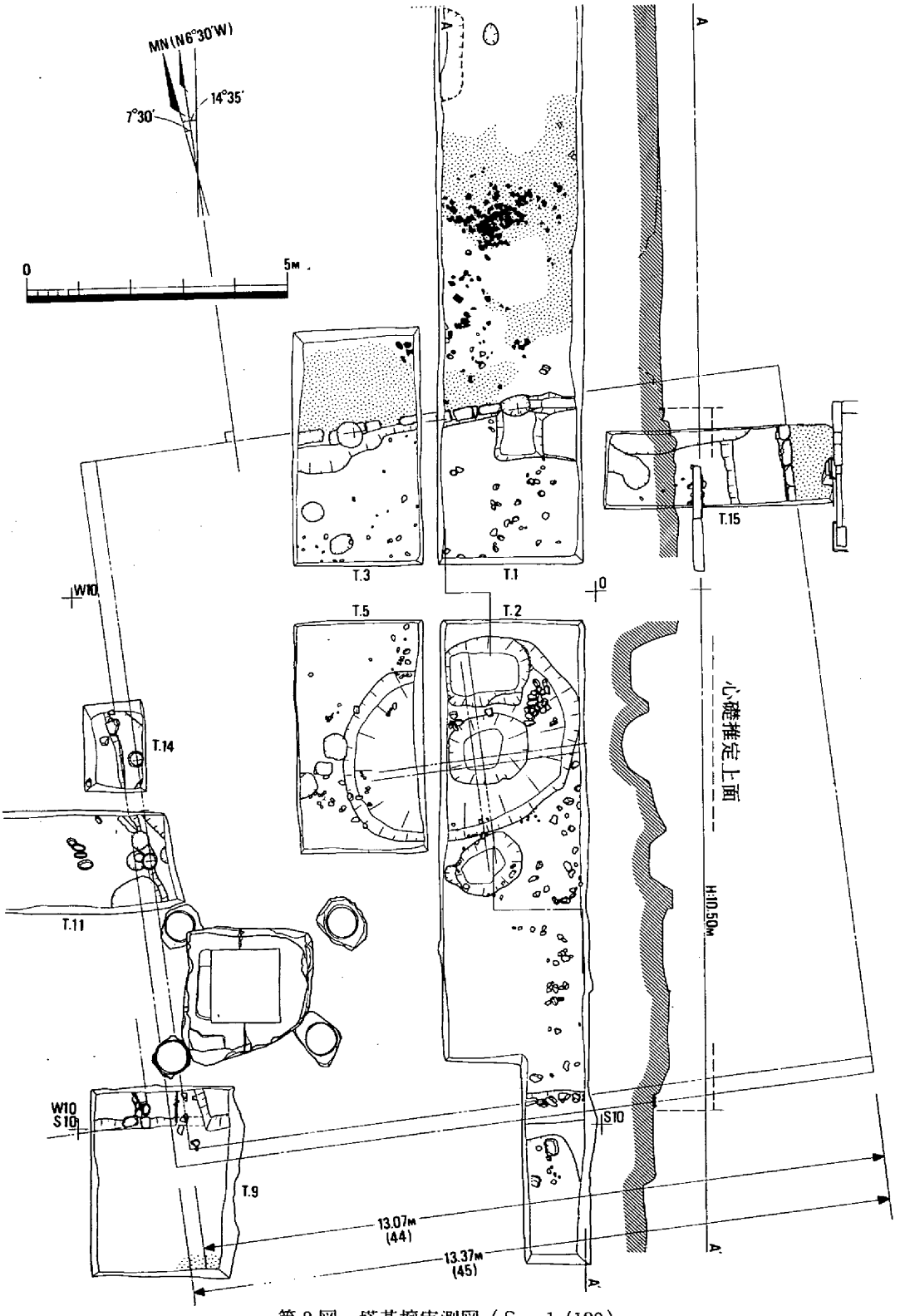
主要なトレンチの状況を記したい。

塔基壇は現在の門満寺境内の山門と本堂の間で検出された。第１・３トレンチで北端の延石列，第15トレンチで東端延石列を検出したが，南端については第２トレンチで地業に関係したとみられる粗雑な石列を検出したにとどまり，西端については第11・14トレンチで軽い段を確認したのみで，正確な規模は測れなかった。しかし第11トレンチでは延石とみられる石が一個やや動いた状態ではあったが残存していたことと，第９トレンチで基壇南西隅らしき高まりを検出したこと，また第１・３トレンチの基壇端で発見された柱穴と同様の柱穴が第11・14トレンチで検出されたことなどから，第11・14トレンチの段がほぼ基壇西端に近いと判断し，天平尺によって44尺または45尺の規模の塔基壇を復原した。延石列の存在を考慮すれば45尺の方がより適当かと考える。延石は自然の平石を加工したもので，上面の高さと，基壇に対して外側の面を揃えるように並べられていた。延石の個々の大きさは長さ50cm，幅20cm前後あり，石材は主に花崗岩であった。第15トレンチでは延石列の内側に瓦を立て並べているのが検出された（図版６）。トレンチ北半でも抜取穴が検出され，第15トレンチの基壇東端部分では本来延石の内側に瓦を立て並べてあったものとみられた。しかし，第１・３トレンチではそのような状況は検出されなかった。第15トレンチでは延石列から１ｍ程内側で段が検出されたが，第１・３トレンチではそのようなものは認められず，この段は山門の建築に伴うものではないかと推測している。

第１・３・15トレンチでは基壇の周辺に玉砂利が敷かれていた。砂利は多く径５cm内外の小さなもので，なかに20～30cmのものが混じるというかなり不規則なものであった。第１トレンチでは基壇端から5.5mの間に砂利が敷かれ，約３ｍ離れた所では瓦溜りがみられた。第１トレンチで砂利敷を断割してトレンチを入れたところ，雨落溝らしき落込みが検出され，溝中には瓦が包含されていた。このことから，玉砂利は塔の建立当初からあったのではなく，雨落溝を埋めた後に敷かれたものと判断される。

基壇の中央で長径4.8m，短径3.5mの大形土坑が検出され，土坑内にはさらに二つの一段深い土坑が穿たれていた。北側の土坑には瓦と円礫が充填されていた。土層観察の結果これは切合関係にある二つの土坑が重複していることがわかり，北側の一段深い土坑を大形土坑が切り，大形土坑の中央が一段深くなっているというように理解された。大形土坑中からは大量の花崗岩の割石と共に江戸時代の瓦が出土した。ちなみに，現在塔心礎の上に据えられている石造五重塔は1769年の建立であり，心礎はまっ二つに割られている。このことから大形土坑は心礎抜取穴とみられ，北側の土坑については，心礎が原位置にあった時，門満寺建立のための整地作業で出土した瓦礫を穴を掘って埋めたものと推定した。なお，大形土坑の底部北東で検出された集石については，心礎を安定させるための根石ではないかとみられ，この上面に心礎底面を置けば，心礎上面は第８図の破線の高さに位置することになり，そこまでの高さで基壇高は約95cmを測る。大形土坑中央の一段深い穴については，仏舎利埋納坑という見解もあるが，何らそれを証明する資料は得られず，心礎を移動させるために穿ったとも考えられる。

基壇南端については，本来地表にでていた施設としては段しか検出されなかったが，壁側に設け



第８図　塔基壇実測図（Ｓ＝１/120）

た小トレンチにより石列を検出した。その方向からおそらく基壇の地業に関係したものと考えられるが，具体的な役割は不明である。この石列から40cm南で，基壇の掘込地業の掘形肩部とみられる線が検出された。その線からさらに南では方形の落込みがあり，３類の軒丸瓦等を包含している。どのような遺構になるのか，小範囲のため明らかでない。

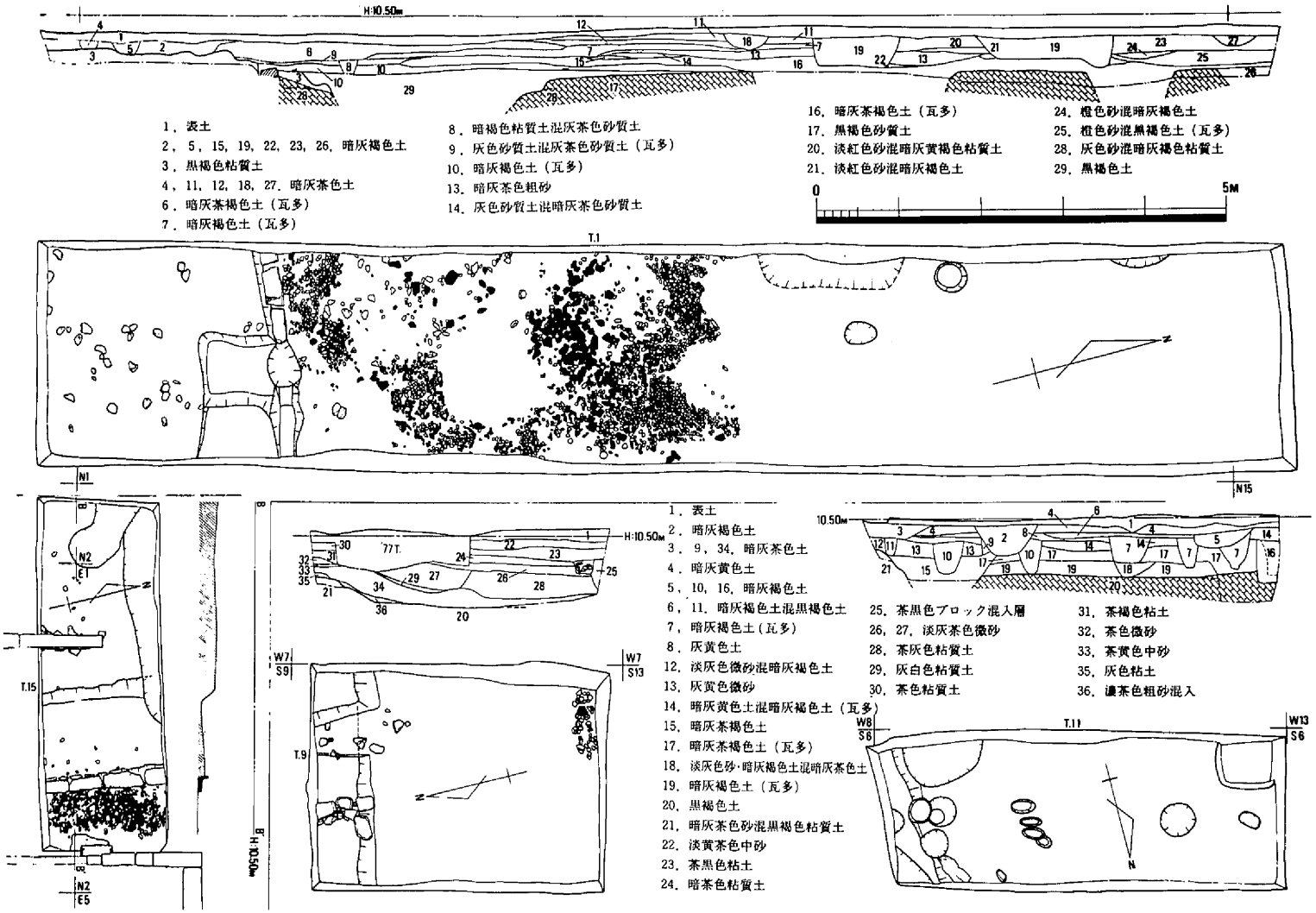
発掘された基壇は暗褐色粘土からなる。長径10～20cmの河原石を多く含んでいる。砂質土を薄層で切れ切れに包含しており，一応叩きしめた土には違いないが，粘土と砂を薄層で何重にも積み重ねたいわゆる版築とは若干様相を異にするようである。しかしこれは，現在残存している部分が基壇の下部構造部分で，この上に丁寧な版築がなされていたという可能性もあり，基壇上部まで暗褐色粘土であったかどうかは不明である。

なお，第１・３トレンチ，第11・14トレンチの基壇端部で検出した柱穴については，二基が対をなし，その中軸が，塔中軸に近いことから，階段に伴うものかと推量されるが，延石の抜取穴を切っていることから，かなり後の施設とみられ，塔創建当時の階段についてはその痕跡を捉えられなかった。

塔の建立時期については，東辺延石列の内側に立てられた瓦と瓦溜の大部分の瓦が，その胎土・成形等の諸特徴からみて同じものとみられ，後述の軒丸３類・軒平２類と対応する可能性が強いことから，白鳳後半と考えられる。雨落溝の中から出土する瓦も瓦溜の瓦と大差ないものである。

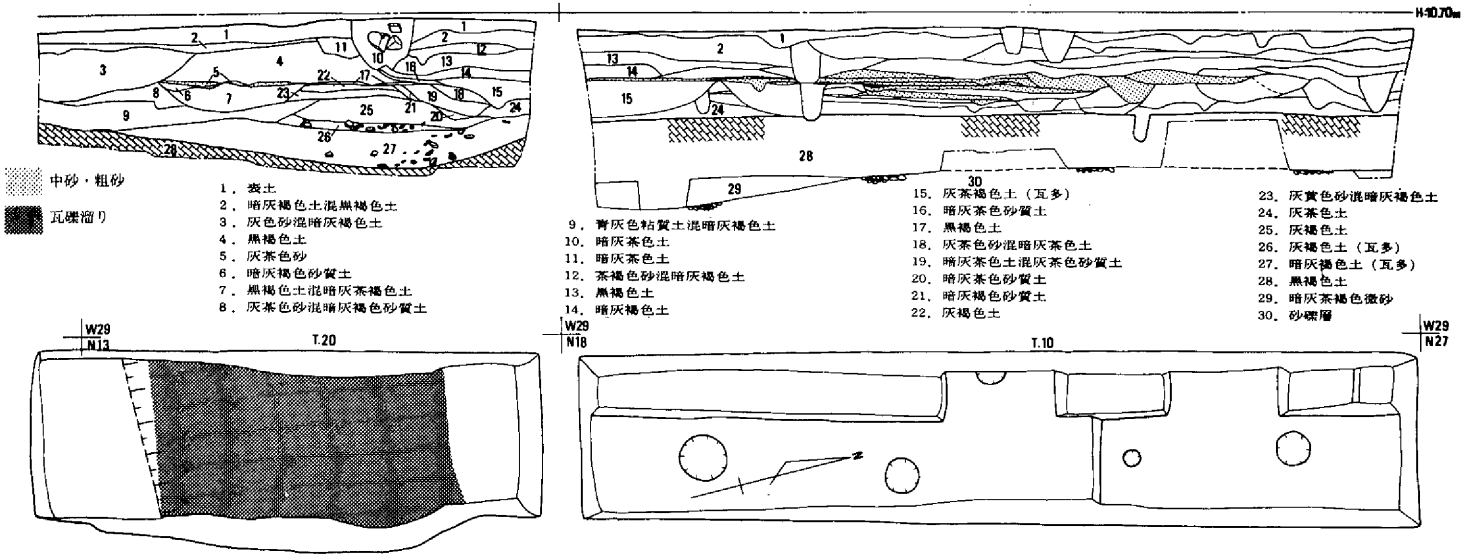
塔の基壇化粧はまったく残存していなかったが，塼が10数片出土しており，横口面に赤色顔料を塗布しているものがみられることを考えれば，塼積基壇であった可能性を考慮する必要があろう。

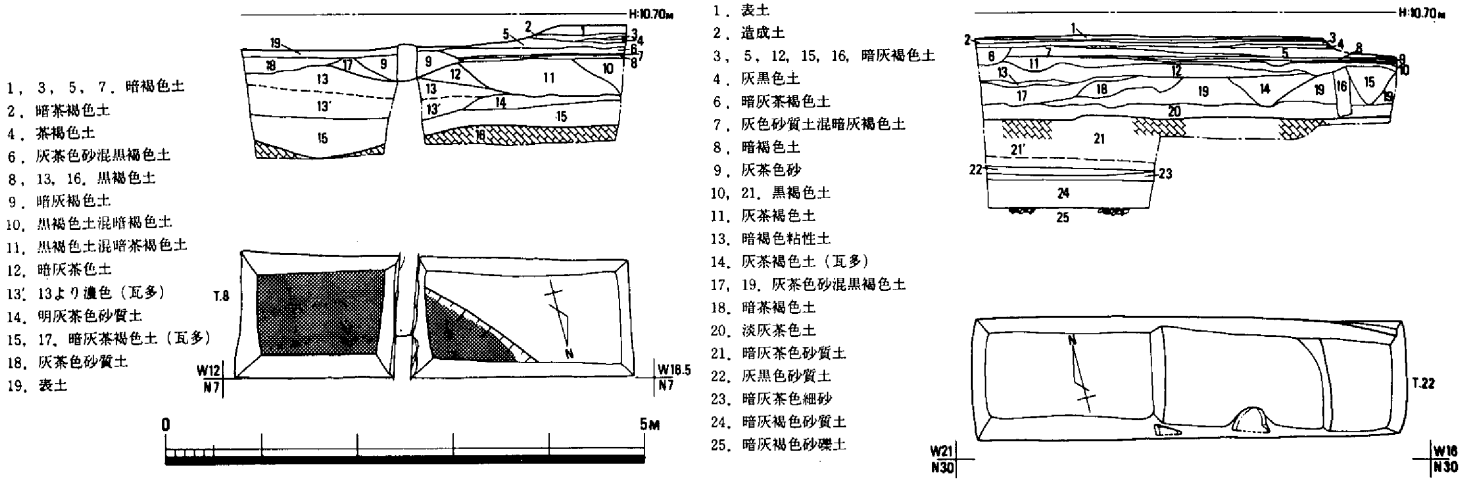
塔基壇周辺以外のトレンチについては大きく二種の土層堆積状況がみられる。第８トレンチと第22トレンチで代表させる。第８トレンチでは表土下40～60cmで瓦と礫を多量に含んだ層がみられ，その層の下30～40cmで再び瓦の堆積層がみられる。上方の瓦礫層は塔基壇西端から，第１・３・20・21トレンチでも検出され，第４トレンチではその層の直下から大きな土坑が２基掘られ，坑内は瓦礫で充塡されていた。この状況は基壇中央の土坑と同じである。土坑内の瓦はほぼ白鳳・奈良期のもので占められるようで，江戸期の瓦はみられない。このことから，この瓦礫層は門満寺の創建に伴う整地によって形成され，大形土坑は瓦礫を廃棄するために掘ったものと考えた。下部の瓦堆積層も礫と混入し合って，建物周辺にみられる瓦溜とは状態が異なっているが，明らかに門満寺以前に形成されたものであり，栢寺廃寺存続中に形成された可能性もある。なお，この下部瓦堆積層からは１類から５類までの軒丸瓦各型式が出土している。もう一つの堆積状況は第22トレンチや第13トレンチの状況がそうであり，第６トレンチから本堂裏そして境内地北部にみられる。地表下50～60cmで，砂や黒色粘土の薄層が水平に認められ，その下40～50cmで廃寺の存在する微高地の自然堆積層に達する。この基盤層の直上には淡灰茶色の微砂質のもろい土が載り，この層から江戸期の瓦片が出土する。つまり，この土層堆積中では栢寺廃寺に関係した土はすべて削平によって消滅しているわけである。中位にある砂または黒色粘土の薄層は，初期門満寺の境内旧地表部分にあたるものと考えている。この２種の土層堆積の連絡については第10・20の南北トレンチで観察することができる（第11図）。第20トレンチでは溝状の落込みに瓦礫の堆積がみられた（図版12）けれど，建物に伴う瓦溜とするような証拠は見出せなかった。



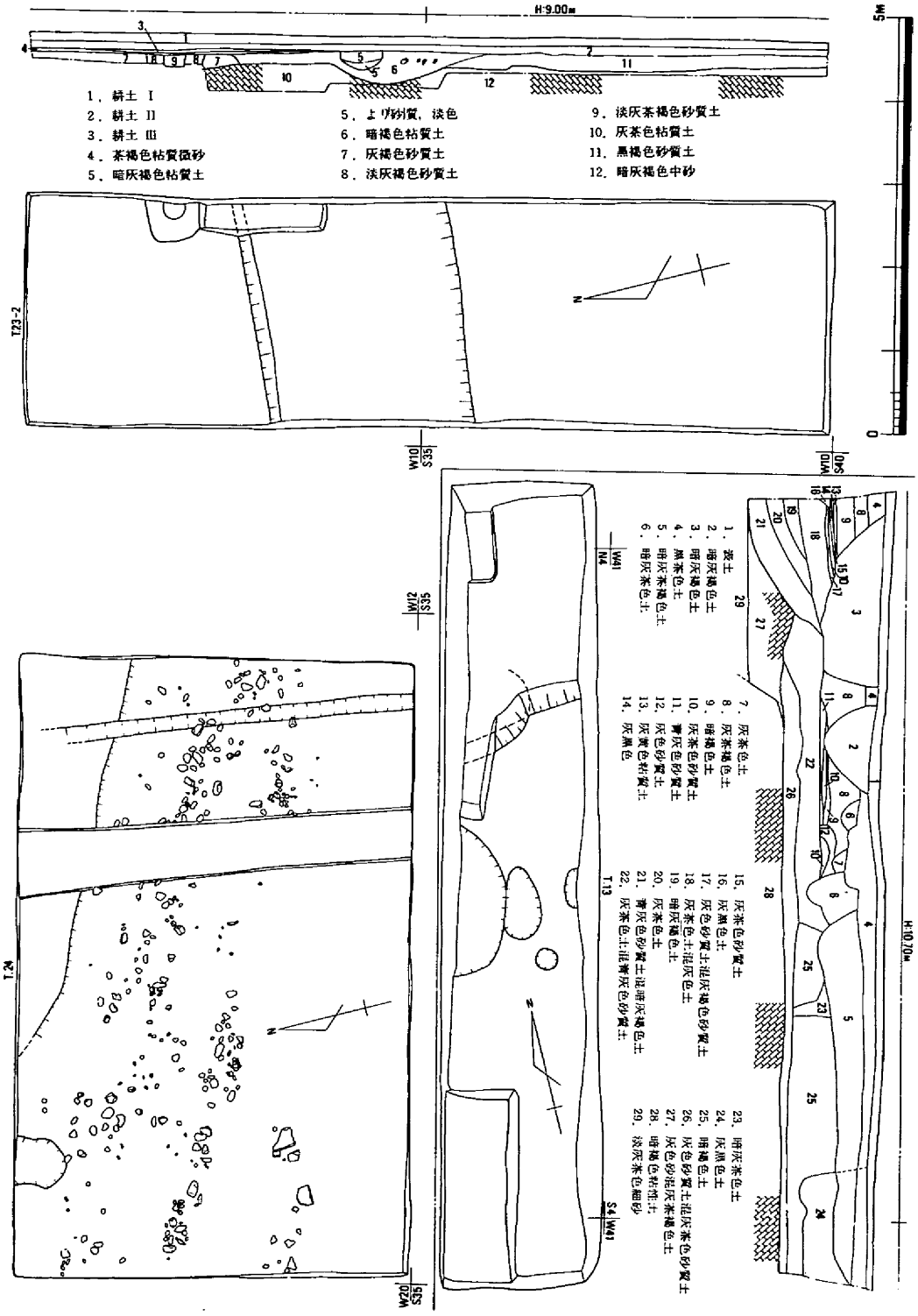
第９図　T.1，T.9，T.11，T.15実測図（S＝1/80）

第10図　T．2実測図（S＝1/80）





第11図　T.8，T.10，T.20，T.22 実測図（S＝1/80）



第12図　T.13，T.23－2，T.24 実測図（S＝1/80）

境内地のトレンチの状況はほぼ上述のようなものであった。寺の南の水田から溝状遺構が検出されたので概略しておく（第12図)。溝は東南東から西北西へほぼ直線的に延びる。溝の上面には礫が溝の走行と平行して並んでいる。溝中からは弥生中期以降の土器片や瓦片が出土した。第23－２トレンチの溝の北肩の土は均質な砂質土であるが，軒丸１類・４類の破片を包含していた。水田部分で廃寺に関係しそうな唯一の土であるが，その形成は廃寺創建よりかなり後のことではある。溝はさらにその後のものである。走行は門満寺と近い。門満寺に関係した遺構かもしれない。検出された方形掘形の柱穴はその対となるべきものを検出しえなかったため，その性格は不明である。　（岡本）

註(1)　玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』1929年，同第２輯　1941年

(2)　永山卯三郎『吉備郡史』上巻　1937年

(3)　中野雅美「吉備における平城宮型式瓦について」『川入・上東』
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　16　1977年

(4)　内山　正編『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報　第９冊　1960年

第４章　遺　　物

昭和52・53年度の二度にわたる発掘調査の結果，大量の遺物が出土した。その大半は瓦類であるが，他に塼，土師器，須恵器，弥生式土器，陶磁器，釘等の鉄器類がある。総数で整理箱200箱にものぼることと，53年度分については調査終了後間がないため，その大半はいまだ未整理の状態にあり，詳述は不可能である。ここでは軒瓦類と塼について若干の記述を行い，他については後日を期したい。

軒瓦類については，現在のところ軒丸瓦５種類，軒平瓦３種類が確認されるようである。軒平瓦については無文で端面のあまり肥厚しないものがあるようにみられ，今後の整理によっては点数に変動があることも予想される。

軒丸瓦（第13～15図，図版17・18)

第１類（第13図１ａ・１ｂ）素弁８弁蓮華文である。現在までのところ，３点が出土している。厚さ15㎜前後と薄手のつくりである。中房は径31㎜と小さく，１＋７のごく小さな蓮子を配す。花弁は幅広で中央が厚みを増す。弁端は高く反り返るが鋭さを欠く。弁端部分は稜線を認めるが，中房に近づくにつれ消失する。全体に鈍重な感じを受ける。間弁は明瞭な稜線をもち突出するが，花弁が幅広く，接触しあっているため，中房までは達しない。１類は外区に変異が認められ，２種に細分できる。外区は内縁と外縁の二段の平坦面からなるが，ｂは内縁に圏線文を一重もつ。ａとｂの相違はこれのみで，他の部分についてはまったく相似といっていい。丸瓦部には三本の凹線が接近して描かれる。瓦当部と丸瓦部の接合は，瓦当部上端を抉り，ハケ状工具で傷をつけた後，丸瓦先端を上に載せる形をとる。内面には粘土を若干付加する。外区外縁が接合前に形成されていたかどうかは明確でない。瓦当裏面はナデて調整するが，外区との境にかすかな凸部がある。胎土は砂

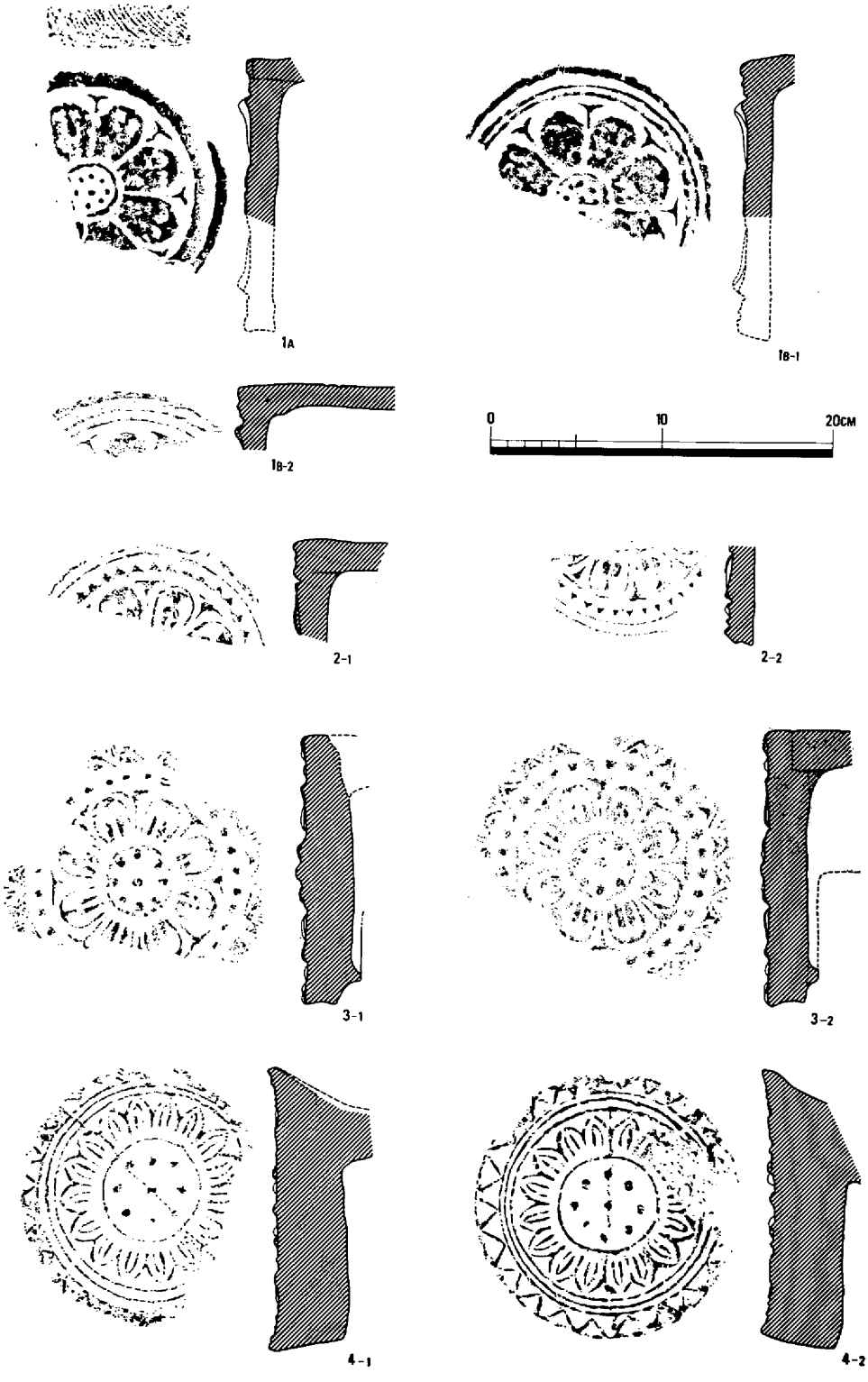
粒をかなり含む。焼成はやや甘く，いずれも淡灰茶色を呈する。

第２類（第13図２）　いずれも断片であり，全形を復することはできなかった。複弁８弁蓮華文である。中房は欠失し明らかでない。花弁は先端が尖るが反転はしない。中央に鈍い稜をもち，子葉のある部分は凹む。子葉は上面平坦で丸味をほとんどもたない。間弁は高く突出するが稜は甘い。花弁間に深く食込むが，中房までは達しない。外区は内区より一段高い。外区内縁には凸鋸歯文をめぐらせ，その外に圏線文を一重めぐらせる。凸鋸歯文は三角錐状に中央が尖る。外縁は断面三角形の凸帯状を呈し，瓦当下半では，端面は瓦当面に対して鈍角となって傾斜している。瓦当部は薄く，15㎜程度の厚さを測る。瓦当裏面はナデて調整している。瓦当部と丸瓦部の接合にあたっては，瓦当部円盤の上端に丸瓦の小口面を直接当て，接合部内面には厚く，外面には薄く粘土を付加する。したがって瓦当部上端はわずかに反りをもつ。胎土はかなり精選され，焼成は良好で堅く焼けしまる。一部には焼きの甘いものもある。色調は青灰色，灰白色を呈する。

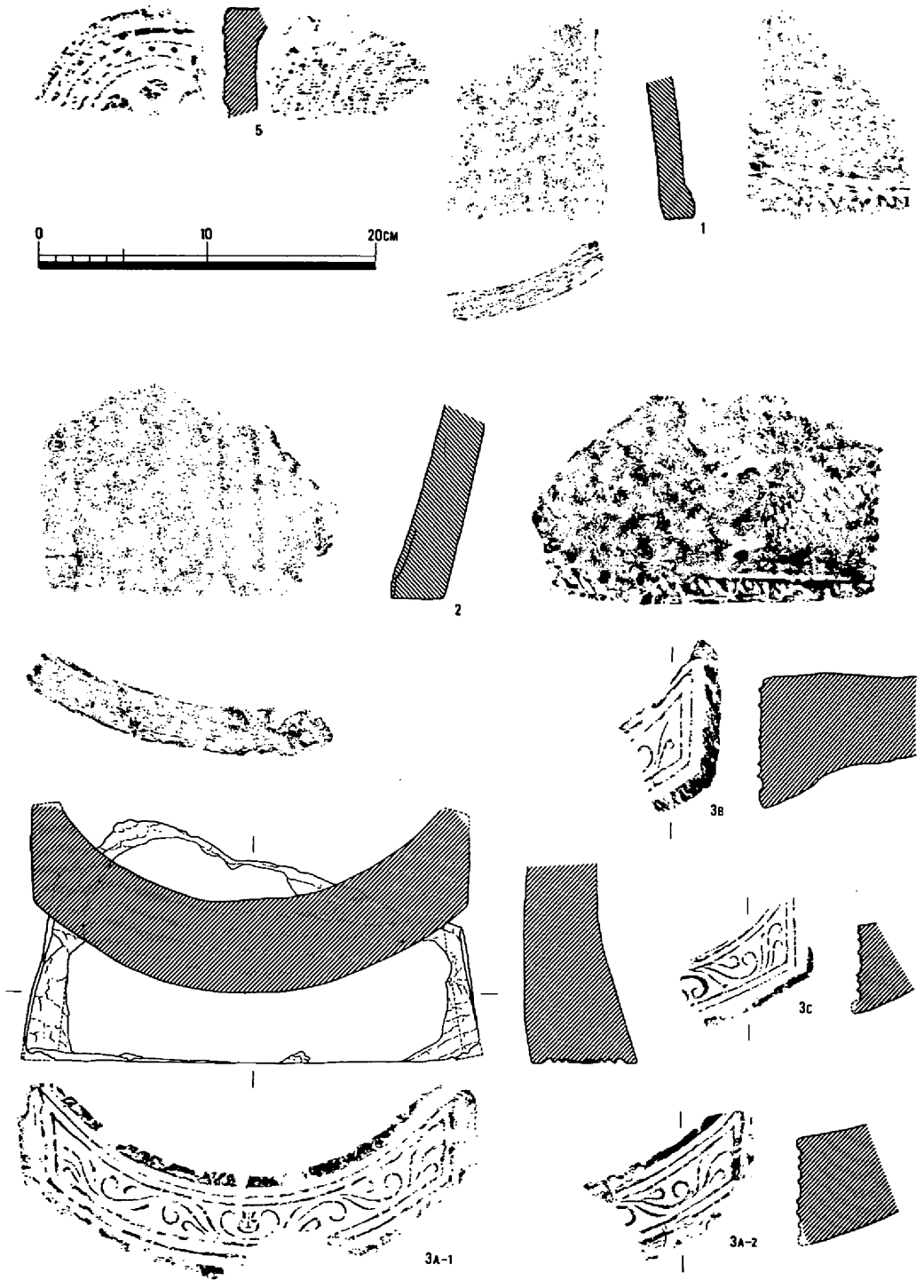
第３類（第13図３）　第２類と同様の複弁８弁蓮華文である。今度の調査でもっとも多く出土したものである。中房は径42㎜を測り，１＋８の蓮子を対称形に配す。花弁は先端が尖り，反り気味に高く突出する。花弁中央には鈍い稜をもつ。子葉は２類と較べてはるかに長く，丸味をもち，断面半円形を呈する。間弁は大きく中房に達する。中央部が突出するが稜は鈍い。外区は平坦縁となる。内縁には連珠文を配し，外縁には二重凸鋸歯文をめぐらせ，鋸歯文間は三本の放射状凸線で埋めるという華麗な装飾を施している。いわゆる「吉備寺式」の構成文様を取り入れたものであろう。珠文は16，鋸歯文は21を数えるように復原される。鋸歯文は不揃いで，厳密な幾可学的割付を行なっていない。３類の瓦当部は１・２類と比較してかなり厚く，25㎜前後ある。瓦当部と丸瓦部の接合は２類と同様であるが，外面接合粘土はかなり厚い。また中には，瓦当部裏面上端に丸瓦を接合するための段をつくった例もある。３類は瓦当部裏面下半に突帯をもつことが形態上の大きな特徴となっている。胎土は石粒・砂粒を多量に含んだかなり粗雑なものである。焼成も一定せず，堅緻なものも，軟弱なものもあり，色調は暗灰色から灰白色までみられる。

第４類（第13図４）　平城宮6225式の亜式といわれるものである。本来は複弁８弁蓮華文であったものが，文様のくずれを生じて単弁16弁に変化している。中房は一重の圏線で囲まれた中に１＋８の蓮子を置く。内区は花弁・子葉を外郭線で単純に表現している。外区には三重の圏線文をめぐらせ，その外の傾斜面に線鋸歯文を飾る。この瓦は瓦当面を半割する形で范の割れが凸線となって走り，同笵関係を知る大きな手掛りとなっている。瓦当部は40㎜ときわめて厚手のつくりである。丸瓦部の接合にあたっては，瓦当の中央よりやや上方で溝をつけて，挿入して接合したとみられ，外面接合粘土はきわめて厚く，瓦当上端から丸瓦部へかけて大きな傾斜をなしている。胎土は石粒・砂粒を多く含み，再度火を受けたためか黒く変色し，軟化している。

第５類（第14図５）　53年度の調査で一片のみ出土した。比較的小形で薄手の瓦である。破片ではあるが，おそらくは８弁の蓮華文になるとみられる。内区は幅広の短い花弁の蓮華文を圏線で囲んでいる。外区は二重の圏線の間に小さな連珠文を配し，その外にさらに一重圏線文をめぐらせ，平坦縁で終わる。瓦当部の厚さは15㎜程度である。瓦当裏面には布目圧痕が顕著に認められ，一本



第13図　出土遺物(1)　軒丸瓦　（S＝1／4）



第14図　出土遺物 (2)　軒丸瓦・軒平瓦　（S＝1／4）

造りの手法によるものとみられる。胎土には石粒・砂粒を多く含み，焼成良好で，茶褐色を呈する。

軒平瓦（第14図，図版19）

第1類（第14図1）　きわめて薄手の瓦である。平瓦部凸面を広く削り，段顎をつくっている。顎の面には成形時の斜格子文叩目が残存して，一種の文様的効果をみせている。瓦当面は箆描き沈線を一条引いただけの簡素なものである。胎土はわりに精選されたもので石粒はほとんど含まれない。焼成は良好であるが若干甘い。色調は淡灰茶色を呈している。この瓦はそのつくりが非常に簡素なため，一見軒平瓦とすることを躊躇させるが，顎の段がきわめて明瞭であり，残存する平瓦凸面全面を削っていることから，段顎を意識したものとして軒平瓦の1つとみた。

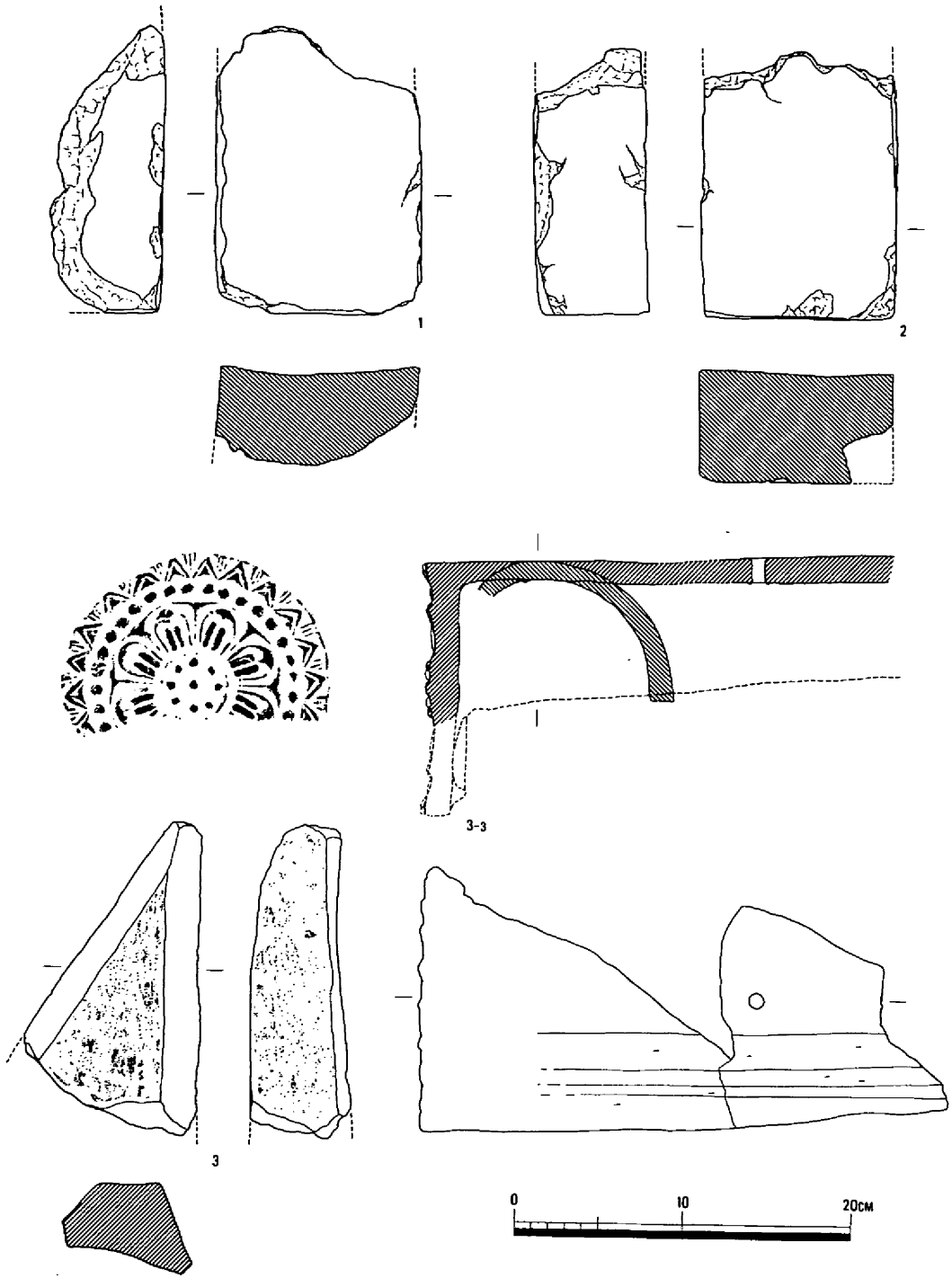
第2類（第14図2）　1類と同様の手法で段顎を形成していることから，これも軒平瓦であると考えた。しかし，段は1類ほど明瞭ではなく，段のない部分もみられ，また平瓦部凸面の削りも浅いためか，斜格子文の叩目が一部に残存している。瓦当面は無文とみられ，箆削りによる砂粒の移動痕のみがある。1類よりははるかに厚く，また形も大きい。瓦当面は若干肥厚するようである。胎土には石粒・砂粒をかなり含む。焼成は甘く，色調は灰白色を呈する。

第3類（第14図3）　平城宮6663型式に類似した均整唐草文である。右半の第3単位の相違から3種に細分できる。aは瓦当面の完存したものが一点出土した。平城宮6663型式と比較するといくつかの相違点が指摘される。まず，図示したものは厳密には左右対称になっていない。左半の第3単位は主葉に支葉が3本もあり，右の支葉2本と異なる。また右半第2単位の第1支葉は右へ巻き込んでいる。図示したものは6663の中心飾と異なり，垂飾の中にもう1つ垂下する飾が入っている。顎の形状は曲線顎で，瓦当面はかなり肥厚する。平瓦部凸面には縄目文叩目が瓦当面から6cmの幅の無文帯を置いて全面にみられ，凹面には布目痕は認められない。胎土には石粒・砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好で，堅くしまり，灰色を呈する。全面に無数のヒビ割れがみられる。bはaよりさらに厚手で大形である。第3単位の第2支葉が左へ巻き込む形をとる。平瓦部凹面には布目痕を残す。調整に箆削りが多用されている。胎土は緻密で，非常に堅緻に焼き上がって，青灰色を呈している。曲線顎である。cはやや小形品である。第3単位はあまり彎曲せず，主葉と支葉が密接して立つ。平瓦凸面には縄目文叩目を残す。胎土には砂粒をかなり含む。焼成は良好である。

隅切瓦（第15図3）　隅切瓦が何点か出土している。図示したものは凸面と側面に縄目文叩目がみられる。丁寧に面取りが成されている。平瓦よりはかなり厚味がある。胎土には石粒・砂粒を多量に含んでいる。

塼（第15図1・2，図版20）　塼が10点前後出土している。いずれも直方体を呈し，無文である。数面に赤色顔料が塗布されている。完形品がないので全長は不明であるが，残存長160㎜，幅110㎜，厚さ65㎜を計測する。ナデで調整されているが，各面ともあまり丁寧には整えられず，かなり凹凸がある。胎土には石粒・砂粒をかなり含む。焼成は良好で堅緻である。灰色，淡灰茶色を呈する。

栢寺廃寺の発掘調査によって出土した軒瓦は，上述のとおり丸瓦5種，平瓦3種があった。次に，これらの編年的な位置づけを試みたい。丸瓦については1類がもっとも古いものと考えられる。aとbの相違はきわめて微細なものであり，時期的な差はないものと考えてよい。1類の類例を調べ



第15図　出土遺物 (3)　塼・軒丸瓦・隅切瓦　（S＝1／4）

てみると，広島県三次市に所在する寺町廃寺出土の「水切り瓦」ＳＩ式（註１）と酷似していることがあげられる（註２）。実見していないため断定的なことは言えないが，写真（註３）でみるかぎり，中房の蓮子間の傷まで一致する。この瓦は寺町廃寺出土軒丸瓦のうちでは最古のもののようであり，660年代前半と比定されている（註４）。２類と３類はともに白鳳期後半のものとみられるが，２類が３類に先立つようである。その根拠としては，まず２類のつくりが１類同様薄手であるのに対し，３類は後続する４類のようにかなり厚手になることがあげられる。また３類の連珠文が白鳳期の中では新しい要素であることも考慮される。３類が外区外縁に採用している二重凸鋸歯文は，備中一円を分布範囲とする「吉備寺式瓦」(註５）の構成文様であり，内区の複弁文は２類と同様である。このことから，２類と「吉備寺式瓦」との融合によって３類が生み出された可能性が強いとみられる。以上のように，白鳳期のものとしては１～３類があるが，１類は白鳳前半，２類は白鳳後葉，３類は白鳳末と考えたい。４類は平城宮6225式の亜式であることから年代比定ができよう。6225式は奈良時代前半のものであり（註６），４類もこれに近いか，遅れても奈良時代中葉であろう。５類はその技法上の特徴から平安時代のものである。平瓦については１類と２類が接近した時期で，３類は上記の6225式の亜式の瓦とセットになるものと考えられるので，同時期と判断される。１類と２類の差は薄手と厚手，小形と大形という対照的な関係から考えれば，丸瓦の２類と３類の対照とよく合う。平瓦２類の胎土は丸瓦３類のものとよく類似している。平瓦２類は塔基壇北方の瓦溜りから出土したが，この瓦溜りから出土した平瓦と軒平瓦２類は同じ胎土であり，また軒丸３類もこの瓦溜りから出土している。このようなことから，軒平２類は軒丸３類とセットになる可能性が高い。軒平１類は同２類に先立つとみられる。このようなことから，平瓦については１類が白鳳後葉，２類は白鳳末，３類は奈良中葉と考える。塼については白鳳か奈良か難しいが，胎土・焼成からすれば，軒丸３類と近接した時期とみられる。（岡本）

註(1)　松下正司「備後北部の古瓦」『考古学雑誌』55－１　1969年
(2)　間壁忠彦氏のご教示があった。
(3)　森　郁夫「瓦の様式と伝播」『古代史発掘』９ 講談社　1974年
(4)　註(1)に同じ
(5)　葛原克人・池畑耕一「第Ⅴ部　二子御堂奥古窯址群」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』
　　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告２　1974年
(6)　奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊　1976年

第５章　まとめにかえて

栢寺廃寺の占める位置

旧山陽道に設置された駅名を列記すると，東から西へむかい，坂長，珂磨，高月〈以上備前〉，津峴，河邊，小田，後月〈以上備中〉，安那，品治，看度〈以上備後〉(註１）とみえるから，いま問題になるところは，備中の津峴駅と河邊駅の間である。津峴駅は，一般に矢部廃寺と称される遺跡が

これに当るのではないかとする意見が有力である。その理由は，この廃寺跡とされる遺跡からは心礎が検出されていないし，近接して惣爪廃寺があるからである。この見解に従えば，次の河邊駅とをつなぐ道路としては，一般にいわれている旧山陽道が古代にまで遡るか，あるいはいくぶん南北にふれていたとしても，それほど隔たらない位置を想定してさしつかえない。そうすると，栢寺廃寺は旧道から約1.5kmも北の，交通の要衝から離れたところに位置したことになるが，第1章でのべた旧河道をよみがえらせるならば，「吉備の津」の一部を掌握しよほど交通の便に恵まれた場所を選地したことが理解できる。

創建時期および氏族の動向

栢寺廃寺は，軒丸瓦を手がかりにするかぎり，種類が増加したとはいえ，白鳳期の中にあって白鳳期を遡ることはない。備中古代寺院址の中で確実に飛鳥創建にかかるものは，総社市秦の秦原廃寺（第3図14）と，その可能性のきわめて高い真備町箭田に所在する箭田廃寺（第3図15）である。前者は，瓦当15cmを測る8葉単弁の連華文軒丸瓦で，間弁に小珠文をおく飛鳥期の特徴をそなえているので，時代判定に異存をさしはさむ余地はない。そこで問題は，後者の箭田廃寺についてである。鐘林山吉備寺に保管されつづけている鬼瓦の一つは断片であるが，中央に7葉単弁を配す様式のもので，奈良・奥山久米寺，茨城・新治廃寺などと同一様式に属し，これらとセットになる軒丸瓦は，単弁8葉の飛鳥期のものとされている（註2）。したがって，箭田廃寺から飛鳥期の軒丸瓦が検出されてはいないにしろ，創建が飛鳥期に遡る蓋然性はきわめて高いのである。上記の2寺院址は，古墳時代に巨墳の築成や一大古墳群を形成した吉備中枢地帯ではなく，いずれも高梁川以西の下道郡に属している点は注目されてよい。これら寺院創建氏族を特定することはできないが，壬申の乱（672年）以前にすでに，おそらく秦氏および薗氏の台頭があり，そうした動向と寺院創建とは深く関連するのではないかと思われる。

いま一つ興味深い重要な寺院址がある。それは，笠岡市関戸唐臼にある関戸廃寺（第3図21）で，倉敷考古館によって塔基壇について発掘調査され規模と構造が判明した（註3）。その3種の軒丸瓦のうちの一つは，奈良・川原寺のそれと類似した瓦で，外区を面違鋸歯文で飾っている（註4）。この瓦が八賀晋の説くように(註5)，壬申の乱後，天武朝側によって論功行賞として使用許可されたとすれば，寺院を創建した氏族と天武朝との結びつきは強固なものであったと考えられる。関戸廃寺のある笠岡の地名と笠氏を直接的に結びつける考え方は速断にすぎるが，他に有力な本拠地がみあたらないので通説に従っておこう。いずれにせよ，壬申の乱後の地方豪族に対して身分制を画一的に確立する目的でなされた「八色の姓」の制定（684年）のさい，吉備氏一族のうち朝臣姓を授けられたのは下道氏と笠氏の2氏にとどまっている点は，かつて吉備政権の中核にあった加屋氏の消長と好対照をなしている。（葛原）

栢寺廃寺出土の瓦

栢寺廃寺出土の瓦については従来から軒丸瓦2種，軒平瓦1種が知られていた（註6）。今回実施した調査によって，新たに軒丸瓦3種，軒平瓦2種の出土をみ，栢寺廃寺使用軒瓦の全貌がおぼろげながら把めたものと考える。ここでは瓦が提起する問題について若干の考察を行いたい。

まず，今回の発掘調査の大きな成果の１つとして軒丸１類の発見をあげなければならない。軒丸１類は白鳳時代前半に比定されるもので，栢寺廃寺の創建が従来考えられていたよりもさらにこの頃まで溯ることが確実となった。ただ，１類は52年・53年の両年度の調査でわずか３片の出土をみただけであり，その数からして，創建時の伽藍がきわめて小規模であったことが予想される。軒丸瓦の個体数をみると３類が圧倒的に多く，次いで２類と４類，そして１類となり，５類は１点のみの出土である。編年的な順序を考慮すれば，栢寺廃寺の堂塔伽藍は一挙に建てられたものではなく，徐々にその数を増し，軒丸３類の時期にほぼ整備され，その威容を誇ることになったものとみられる。

出土した大量の平瓦の中には縄目叩きのものがかなりみられた。この平瓦はおそらく軒丸４類・軒平３類に対応するとみられるが，その数から考えると，これらは差替えのためだけに使用されたのではないようで，改築・修復と呼ぶべき規模の工事がなされた可能性が強い。軒丸４類の中には明らかに火を受けたものがある。これは軒丸５類がわずか１点のみ出土したことと無関係ではない。おそらくは，軒丸４類の使用後に栢寺廃寺は火災にみまわれ，堂塔の多くが焼失したのではないかとみられる。軒丸５類に続く時期の瓦が出土しなかったことは火災後の復興の規模を表しているようにみられる。筆者の浅学から軒丸５類の時期を明確に指摘しえないが，栢寺廃寺は平安のある時期にその命運を絶ったものとみられる。以後延宝８年（1680）の賀陽山門満寺の建立まで，その荒廃した姿を白日のもとに晒していたのであろうか。

軒丸１類についてもう１つ見逃すことのできない事実に寺町廃寺出土の「水切り瓦」との酷似がある。今，軒丸１類が「水切り瓦」であると仮定して考察を進めてみたい。「水切り瓦」の出土地は次のとおりである（註７）。

寺町廃寺・広島県三次市江田町寺町　寺戸廃寺・広島県三次市三次町寺戸　康徳寺廃寺・広島県世羅郡世羅町寺町　亀井尻瓦窯跡・広島県庄原市上原町亀井尻　横見廃寺・広島県豊田郡本郷町下北方　大崎廃寺・岡山県岡山市大崎　神門寺廃寺・島根県出雲市塩冶町

大崎廃寺は栢寺廃寺から東へ足守川を渡りわずか2.6kmの距離を隔るにすぎない。分布の中心である備後北部から遠く離れて孤立していたかにみえたこの点が栢寺廃寺の出現によって再び大きな意味を語り出す。備中中枢部と備後北部の結びつきが強く意識される。

栢寺廃寺出土軒丸瓦はかなり地域色の強いものである。１類は前述のとおりであるが，２類・３類もその蓮弁の形態は川原寺式に代表される中央の複弁とはかなり相違している。弁端は尖り気味に終わり，横見廃寺（註８）等安芸・備後地方の寺院址に類例がみられるようである。３類の外区文様には備中中枢部にその分布がみられる「吉備寺式瓦」の影響が顕著に認められる。しかし，「吉備寺式瓦」そのものである倉敷市二子御堂奥古窯址出土軒丸瓦２類～４類（註９）が時間的には栢寺３類と併行するとみられるにもかかわらず出土しないことは注意される。このようなことから，栢寺廃寺は「水切り瓦」と「吉備寺式瓦」の分布の接点に位置しているとみることができる。この２つのきわめて地域色の強い瓦の分布圏が栢寺廃寺によって関連をもち，より大きな地域を浮かび上らせる。地域色の強い瓦が一定の分布圏をもつということに対しては，それら私寺の支持母体であった在地豪族間の強固な連帯が想起され，そこに同族結合紐帯をみる向きもある（註10）。これらの

地域が中央勢力に対して隠然とした独自性を保っていることにはそれなりの歴史的必然性があるはずである。「水切り瓦」・「吉備寺式瓦」を含むより大きな地域とは何か。そこにかつての「吉備大国」の残影を見ることは空虚な幻であろうか。「吉備寺式瓦」の地域は奈良時代後半に入って平城宮6225亜型式第Ⅲ類（註11）が斉一的に盛行する。栢寺廃寺も例外ではない。ただ軒丸4類は亜型式第Ⅲ類と比較した際，内区と外区を分ける圏線が三重になり，第Ⅲ類ではまだ子葉らしきものが認められて複弁の名残りがみられたのに対して，4類では完全に複弁の意識が消滅してしまって，4類は第Ⅲ類（二子御堂奥古窯址軒丸5類）よりも後出するものである。ただし，栢寺軒平3類aは二子5類そのものである。依然，「吉備寺式瓦」の分布圏は存続しているのである。

なお，栢寺廃寺出土軒丸1類は「水切り瓦」とすれば最古のものであり，大崎廃寺出土「水切り瓦」も古式のものである。備中の賀夜郡内にある二寺から古式の「水切り瓦」が出土することは，従来言われていたような備後北部の寺町廃寺から備中大崎廃寺への伝播という見方に対して再考を促すものである。ことは吉備と出雲とのつながりにも及ぶ。瓦の詳細な比較検討を要する。

栢寺廃寺の伽藍と寺域

今回の発掘調査は廃寺の伽藍配置と寺域を確認することにあった。しかし結果はそれを検討するにはきわめて不充分なものであった。しかし，今後のため何らかの検討は必要であろう。

塔基壇の検出により寺の方位と中心部は決定した。方位はＮ1°Ｅでほぼ真北方向によったとみられる。この方向は条里方向とは合致しない。これは条里と寺院創建の時期差ともとれるが，廃寺は旧河道に接して位置しているため，この地域には条里が行われず，そのような新開地を選定したためにほぼ真北の方位を取りえたとも考えられる。寺域については従来想定していたように，寺の南側水田の南畦を南限とすると，今回出土した塔は約60m離れている。反転していま150m（1町半）の南北長を推定すれば，第26トレンチがその近接地点にあたる。井戸が検出され，この地点が寺域内に含まれる可能性を示した。またかつて，第4図299－2の北畦がさらに東へ延びていたという伝聞がある。しかし，井戸の時期は不明である。塔の中軸線は南から寺へ至る第4図325－1と318の間の道を通る。この線を寺域中軸として東西107m（1町）をとれば，西限の線は第4図209と213の間の水路と一致する。現在の畦畔からすれば，塔を中心に東西1町，南北1町半の寺域を推定することは可能である。四天王寺式伽藍配置を考慮すべきか。（岡本）

註(1) 池辺　彌『和名類聚抄郷名考證』1966年
(2) 稲垣晋也『飛鳥・白鳳の古瓦』奈良国立博物館・東京美術　1970年
(3) 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葭子『長福寺裏山古墳群附関戸廃寺跡』長福寺裏山古墳群・関戸廃寺址調査推進委員会　1965年
(4) 葛原克人「笠岡市関戸廃寺と農協支所」『岡山県埋蔵文化財報告』7　1977年
(5) 八賀　晋「地方寺院の成立と歴史的背景」『考古学研究』77　1973年
(6) 永山卯三郎『岡山県通史』上編　1930年
(7) 松下正司「備後北部の古瓦」『考古学雑誌』55－1　1969年
(8) 松下正司・河瀬正利・是光吉基他『安芸横見廃寺の調査Ⅰ』広島県教育委員会　1972年
(9) 葛原克人・池畑耕一「第Ⅴ部　二子御堂奥古窯址群」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2　1974年
(10) 註(9)に同じ
(11) 柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16　1977年

1　門満寺全景（南西から）

2．同上（西から）

図版－２

境内全景

１．門満寺境内
（北から）

２．塔心礎
（北東から）

境内地残存礎石

図版－４

塔基壇全景

１．北から

２．西から

塔基壇細部

1．塔基壇北端延石（北から）

2．塔基壇北方瓦溜（西から）

第15トレンチ塔基壇東端延石列

1．北から

2．南から

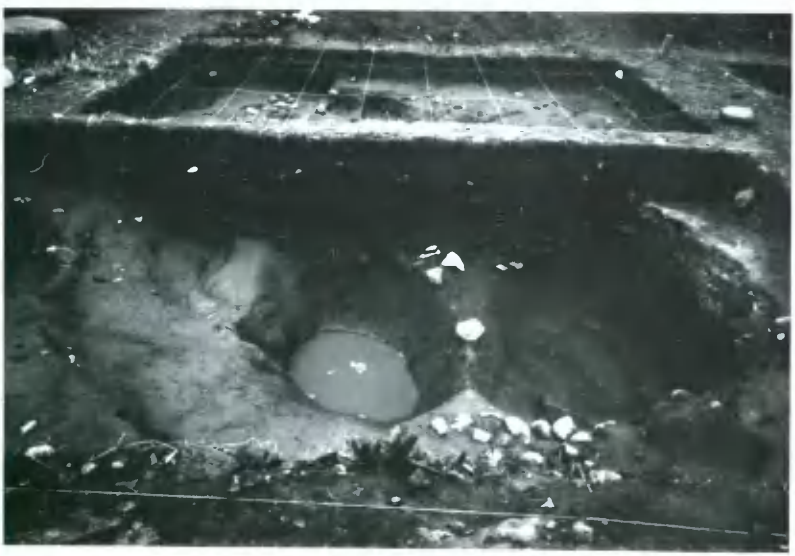
3．北から

1．第Ⅰトレンチ延石細部（東から）

2．雨落溝検出状況（東から）

塔心礎抜取穴

1．南から



2．東から

1．塔基壇南端土層（西から）

2．塔基壇南端石列（南から）

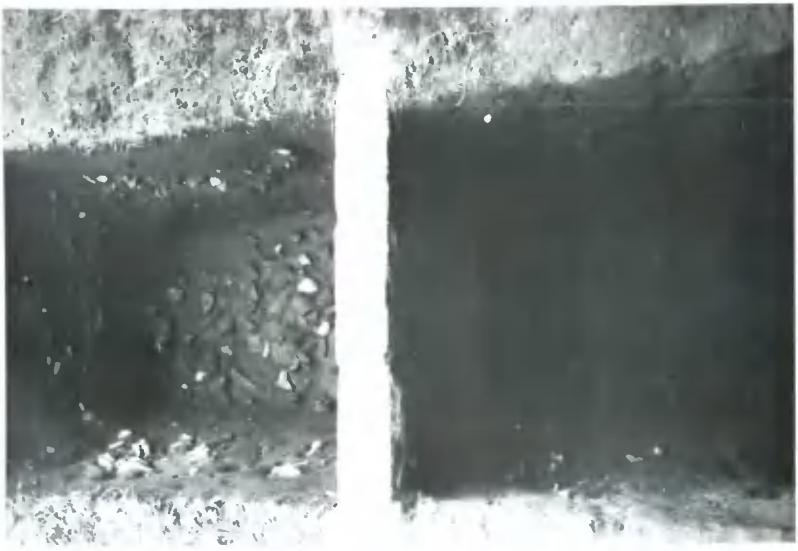
塔基壇周辺トレンチ

1．第11トレンチ（南から）

2．第9トレンチ（西から）

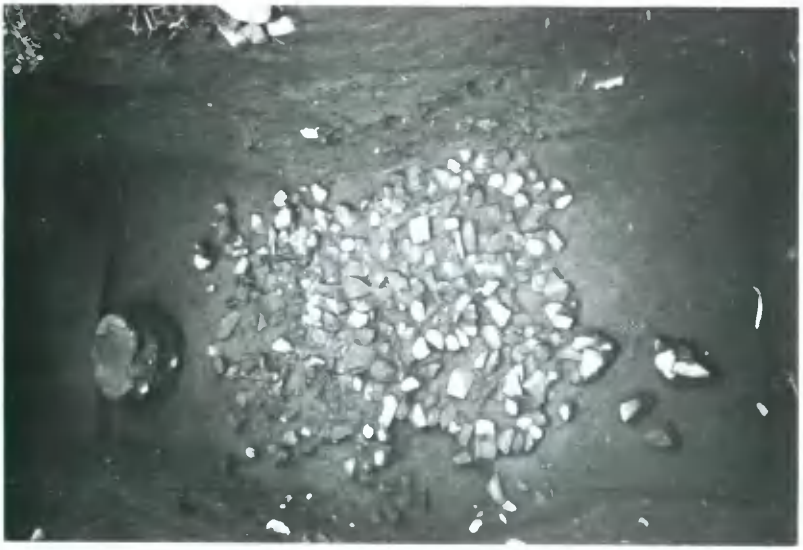
第 8 トレンチ

1．南壁（北から）



2．全景（西から）

第 20 トレンチ



1．瓦溜（北から）

2．西壁（東から）

溝状遺構

1．第24トレンチ(西から)　2．第23－2トレンチ(南から)　3．柱穴　4．溝断面土層(西から)

2．全景（西から）

1．南壁　上：東端　下：西端

1．第26トレンチ　井戸（南から）

2．第6トレンチ（東から）

3．第20トレンチ　上部瓦礫溜（北から）

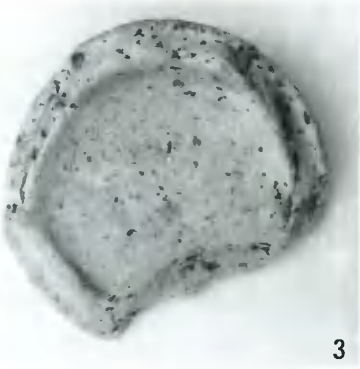
1．第10トレンチ（南から）

2．第13トレンチ（北から）

1A

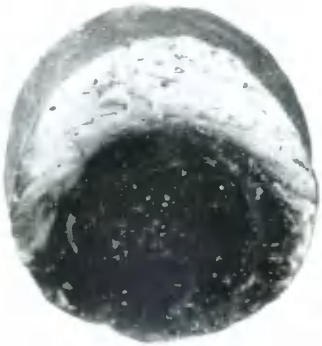
1A

3



3

4



4

出土遺物　軒丸瓦

5

5

1B

2

3

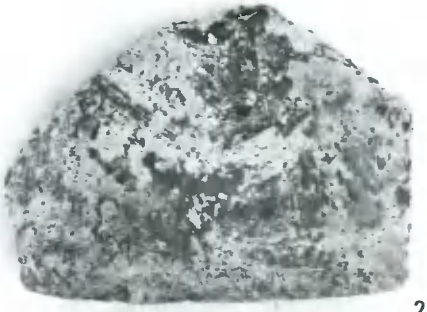
4

3A

3A

3C

3B


2

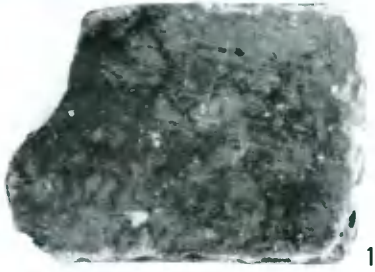
1

図版－20　出土遺物　軒丸瓦・塼・隅切瓦

3

3

2


1

2

3

〈追記〉　脱稿後，広島県立みよし風土記の丘歴史民俗資料館において寺町廃寺出土「水切り瓦」ＳＩ式（府中高校蔵）を実見した。栢寺１類ｂとの異同を検討した結果，花弁・中房はもとより，笵の傷も細部においてほぼ一致することから，同笵瓦である可能性がきわめて強いことが判った。ただ，寺町のものは外縁からはみ出させた粘土を削って「水切り」をつくっているのに対し，栢寺のものには粘土のはみ出しが認められないことから，栢寺瓦の「水切り」の存在については疑問である。歴史民俗資料館指導主事　福井万千氏からは種々のご教示を賜り，色々のお世話になった。深謝します。　（岡本）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　(34)

栢寺廃寺緊急発掘調査報告書

1979年３月20日印刷
1979年３月30日発行

編集
発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下２－４－６